

源平書表記(通)卷六

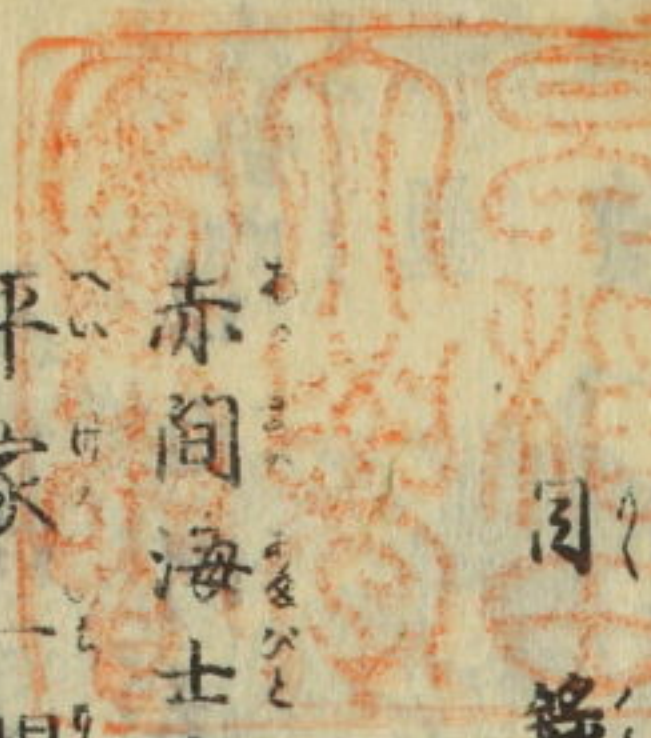
13
3309
6止



3509
6

源平盛衰記圖會卷之六

目錄



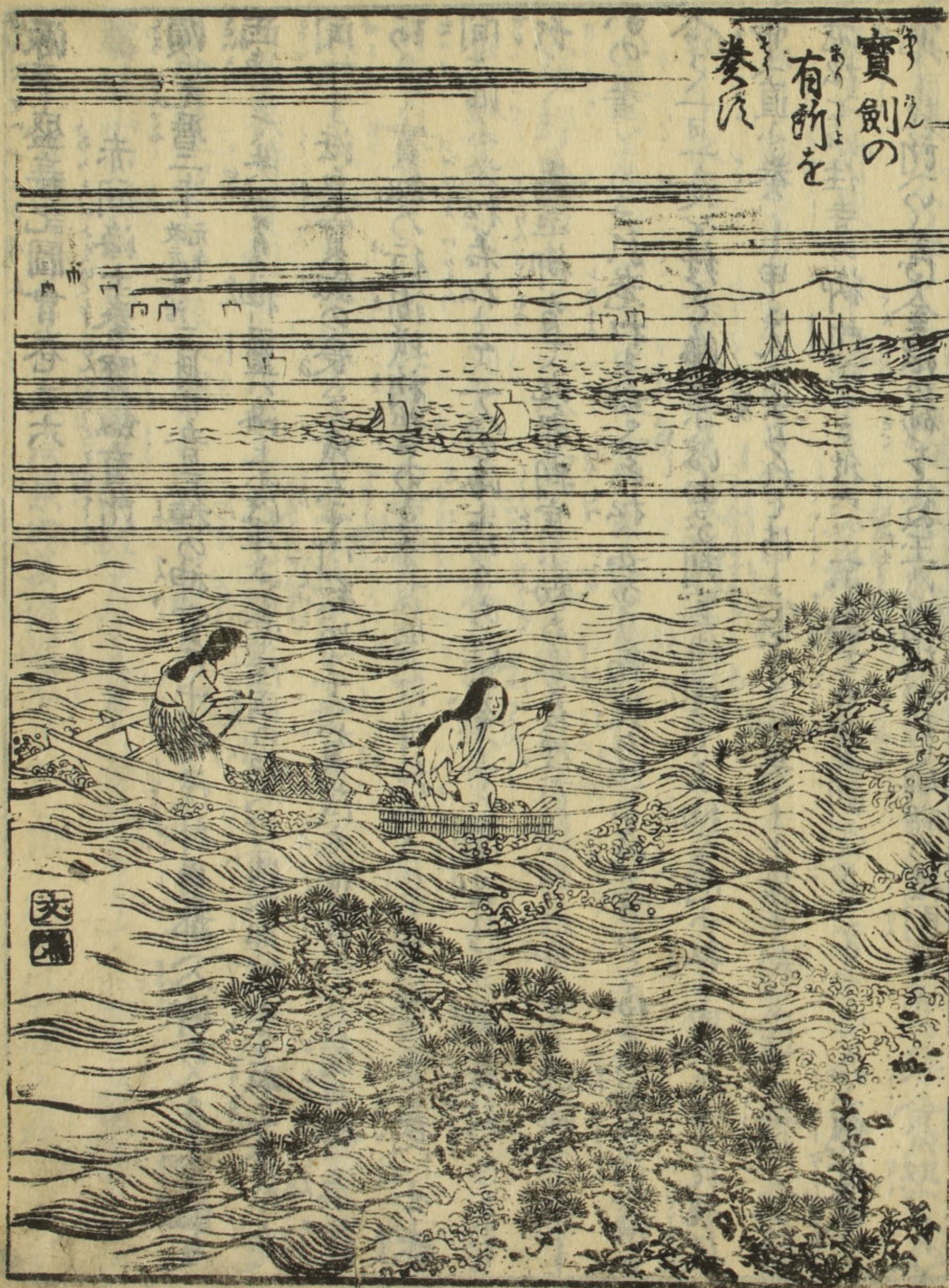
赤間海士奏寶劍有
 平家一門為虜入幕
 源賴朝平宗盛對
 宗盛東關下
 源賴朝義經不
 平重衡於南都斬
 六代君隱北塞
 景清忍痛清水
 文覺續乞命六代并

大正十年八月廿九日
本大學出版部



源平實錄卷之四十四

建禮門院入御
 土佐坊堀川夜
 判官殿郡
 吉野
 忠信謀吉莖衆徒
 忠信完義戰先
 判官義經北國
 義經入高館城
 義經渡蝦夷島
 後白河法皇大原行幸



寶劍の
有所を
夢見



赤間
海士
海中
へく

源平盛衰記圖會卷之六

赤間海士奏寶劍有所

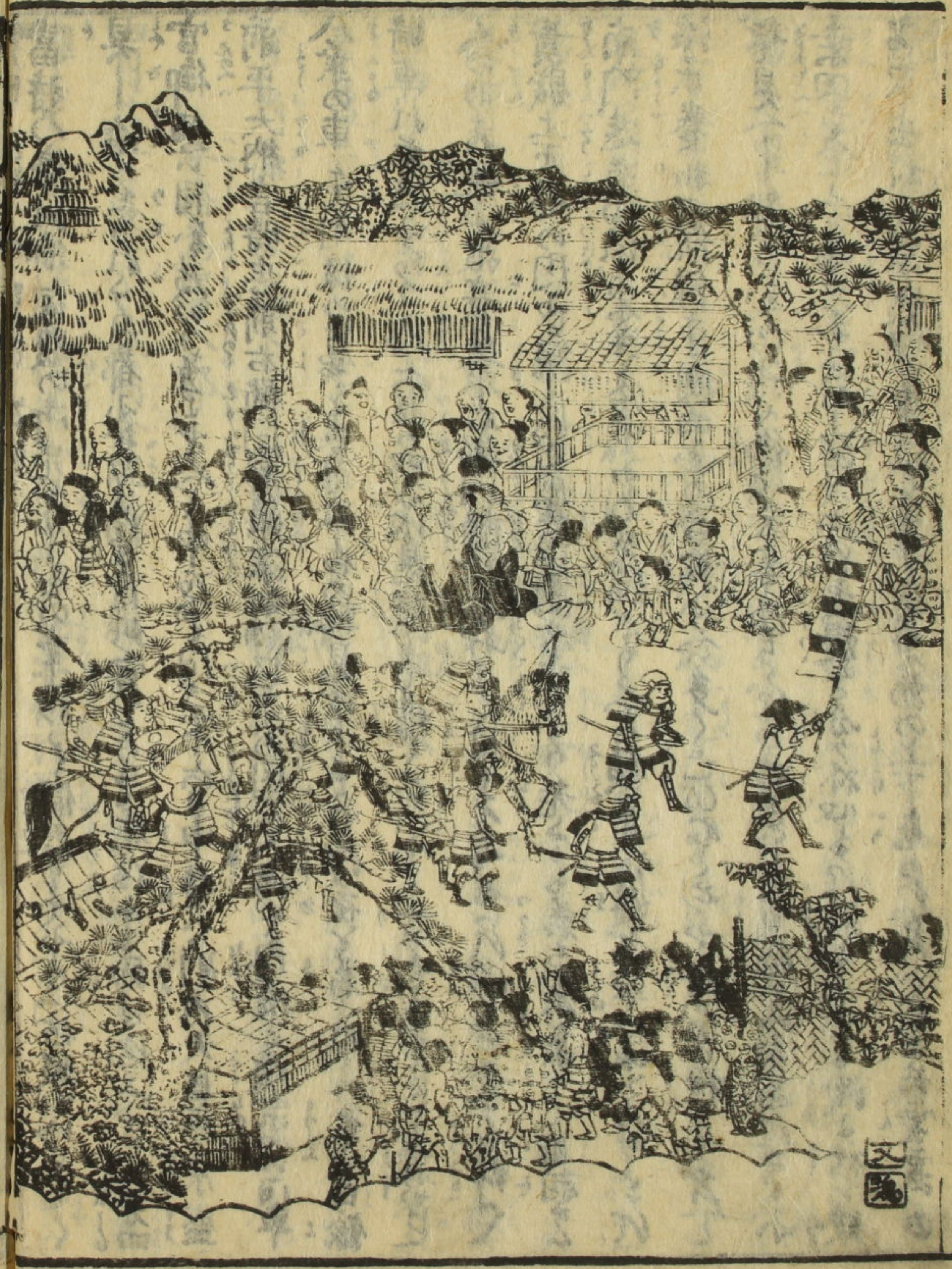
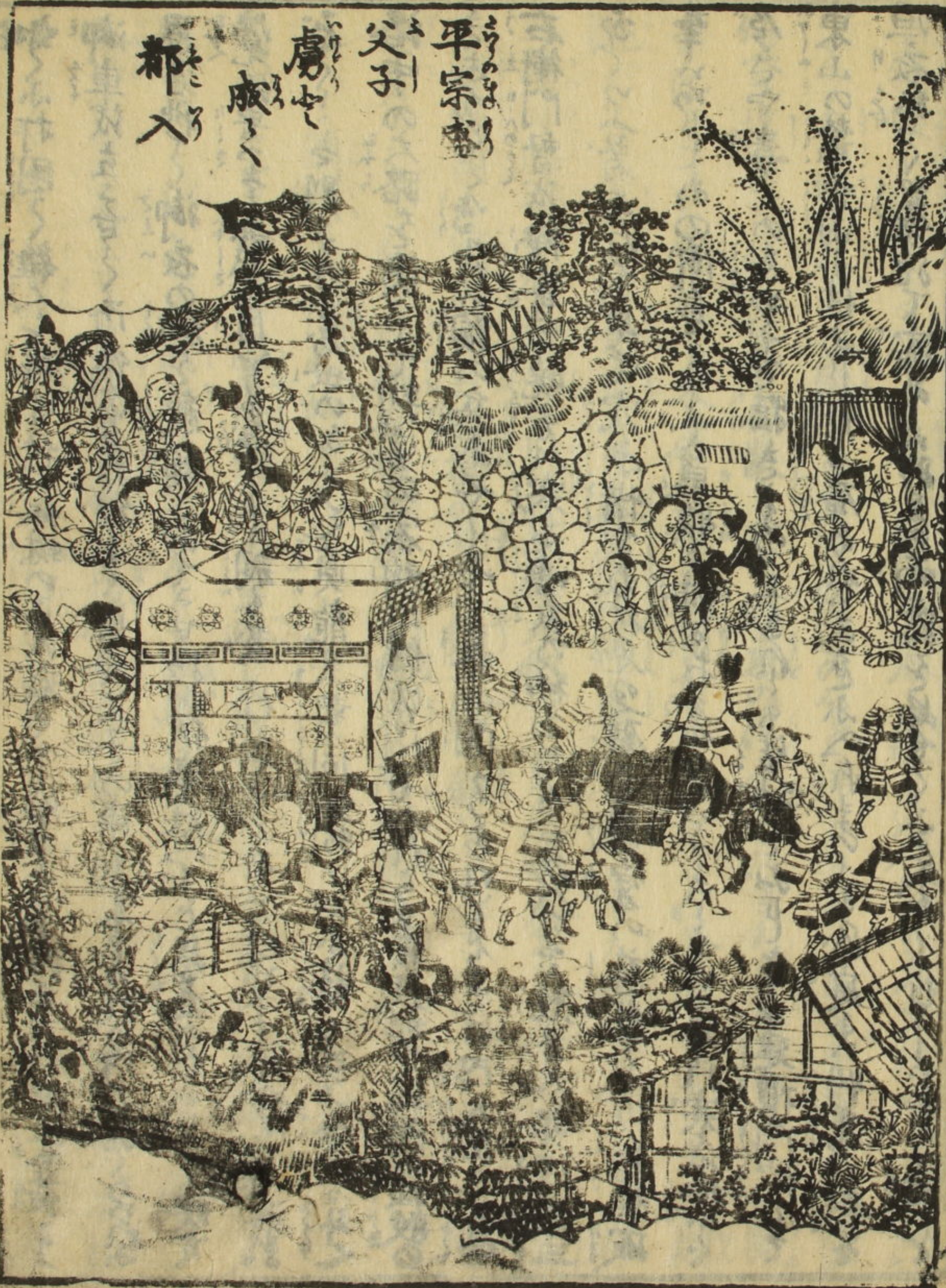
頃元曆二年改元文治元年二月廿三日三種の神寶乃中神護神國都入御ありしを寶劍を
西海へ失ふり神璽の海上に浮るるを常陸國の住人片岡太郎經春が取上奉りて
同下法皇寶劍の喪を以て大御神歎けりて賀茂太神宮小一七箇日御奉流
りて寶劍の行跡祈誓ある事七箇日に神託ありて寶劍の幸長門赤
間浦小老松若松と二人の海士ありしを令して聞召給ふ御告新ありしを
かく法皇還御有て九郎判官小勅ある義經百餘騎に勢よく西海へ下り
かの輩とめされ老松と母と若松の女あり勅詔の詔を作合せらるる母子共海へ
入る一日一夜と経る海上に浮出する判官待倦く子細を問ふ私に申すべき事には
帝直小奏し申えんと云われをばしをこそ相具し上流を相友連小奏聞を
老松と法住寺の御所小ゆき控庭上小奉て云寶劍を尋せしを小龍宮城に
覺し所へいしを金銀の砂をぬ玉の階成りし珊瑚の樓門琉璃の殿舎殿怒る

其有様九人の樓をと思れしを言ふるに難し昔徳門ふたむき大日本國を
帝王の御使と申入侍し紅の袴着る官女三人出く行幸を尋ぬ寶劍
衣の裾をぬき老されしを申入侍りしは女房達内小入り育て大地を
劫り氷雨の暴風烈しく天又則修の誓ありて女來りしを老松を上
小進し其時御羞半に上たりしを見入れ侍る其長二丈りやゆへに
大蛇劍を口より七歳の童子は懐に眼を月比めく口の赤成り日を濃く
舌の紅の袴小似しを詞をかくて云日本乃御使帝小申さし寶劍必し
日本に寶あり此龍宮の重寶ありむし出雲國鞆川上小尾頭寺にあり
大蛇を成人の生契成る事半をばし小素盞鳥尊人民公憐みの大蛇を平け
らふ其時寶劍を老松かく天照太神小ちか其後景行天皇の御宇に日本武尊
東夷征伐の時天照太神よりは劍を授けり表をさく退治神凱陣の時大蛇
膽吹山の麓に出く劍成る人なるも尊い勇猛ありて大蛇を死滅通る
しを力及んて一年の累ぬ其後諸をめぐし敷の川上は大地を徳天皇を

現一源平此乱を記し、秘宮遠く、口小會あり、即實劍を懐き童
男いし帝安徳天皇へ平家大政入道淡路一門のくはあふあを是みよとて
傳ある翠草茂き上れい入道を上をよまう氣高き上臈教と並居りて海小
んまをき小初も鴨を神宮の作あれを元乃質を改りて見まきくやま
大蛇い内よ入のよや奏し、たれは中流なり、先きを月椰雲客みかく奇特を
思ひをあらひり、備も我三種の神器の中、變紐のり、清の相あれり、疑く
崇神天皇の清宇靈威を恐れ、勅使傳し、打し、ゆ本紐とは伊勢太神宮小藏
ら、ゆやとり、出ま、西海の底よ入ふ、勅使傳し、何ぞ龍神我寶、まきよ次ふ
素盞盞尊大蛇を尾より出、太神宮よ、時を作、我天乃岩戸に
有折落、たし、劍とらり、不審決ま、横ぎに淡海公の面向不肯珠の敷もらん
平將為虜入都

四月廿五日夜、入、故高倉院、第二宮都へ、入、せ、法皇より、清遠の御車
進せられ、七條の侍從、信清、清和、供、作、七條坊、城、清、母儀の宿、入、せ、は、官の

當時の帝、此御同腹の清兄と、もの事、何と儲君も、ま、よ、二位、殿、い、く、し、く
具、一、進、せ、られ、り、都、小、お、り、は、ま、は、此、宮、と、ま、を、御、位、少、も、即、せ、給、よ、き、小、第、四
宮、御、運、目、を、及、り、も、ま、せ、く、申、り、ま、同、二、十、六、日、申、時、小、前、内、大、臣、平、宗、盛、
前、平、大、納、言、時、忠、前、右、衛、門、督、清、宗、宗盛已、下、の、囚、人、入、洛、ま、内、府、と、清、宗、は、同、車、
八、葉、の、車、小、前、後、の、屋、を、巻、て、左、右、の、物、見、派、上、る、各、淨、夜、と、布、れ、り、武、士、百、餘、
騎、車、れ、弟、後、少、り、内、大、臣、の、四、方、は、見、廻、り、て、痛、く、さ、ひ、入、る、ま、を、あ、は、に、も、難、じ
人のあ、ね、親、小、疲、衰、ぬ、右、衛、門、督、い、ら、ぶ、と、目、も、ま、よ、な、深、く、さ、く、分、野、く
貴、賤、上、下、都、の、内、も、湯、次、迎、園、遠、園、山、寺、より、老、者、も、若、も、來、集、り、て、馬、羽、を、
南、門、遠、道、四、塚、東、寺、洛、中、小、と、充、満、り、り、を、顧、津、以、將、の、車、儀、と、め、ま、り、
活、承、養、和、の、飢、饑、東、園、西、玉、の、合、衆、小、い、ま、く、亡、ひ、ぬ、と、さ、ま、強、ふ、は、種、ま、を、れ、
皆、見、下、一、都、を、お、ろ、く、終、る、三、年、傳、ら、れ、ゆ、ま、其、有、様、い、み、を、忘、れ、さ、小
來、因、度、下、海、中、お、ろ、ひ、り、小、の、愛、現、を、分、り、心、も、れ、賤、女、ま、も、涙、を、拭、き、
お、來、去、り、小、宗、盛、の、車、近、く、な、る、と、見、物、の、上、下、色、を、れ、り、の、武、士、共、雲、霧、の



如く小打圍く雜人を擲ひて蜘蛛の子を散らすに法皇の六條未蓋す
御車成立ちて御傍有る行多内府父子の車も亦をりし御心願の如
思召種く御衣の袖を龍顔ふあてて供奉れんと只是のまゝして現
覺は事なきも同とも忠て一詞も怠れぬとて我のひり下今かく見れ
るく一と別より其世のあひて真龍失勢同蚯蚓といふ諺もさひ合ふ事
洛中の大路を渡して判官の宿所六條堀川ぞ入れらるる所は宿所の板敷の
きとろくともあれ頼の兵あや一々幕の間よりあれと見えは内大臣の息
右衛門督成檢寄て曉方れ寒小淨衣の袖と打きとけいそを徳井太郎江田三
あぐり若れを見そ穴糸惜やあれは又殿原恩愛の慈悲とて無慈悲
幸いれしあの御身とて草紙の袖とあそ宿のひりていそいそ牛丸寒衣禦と
るさや責の志かた猛きものふあれも皆袖をおしと建禮門院を
東山の麓吉田小住あしたる庵あれいそさ小入れまのまは度むの竹寛軒を
垣衣穿く差絶て宿あはれいそ雨露をぬせぐふまかすむいそまの臺を

登錦帳小纏く明く暮し終ひし今親し人々をみお別れくあはれ
がの舊坊は只も人落つさりの道道のやと伴ひのあせり女房達も初
任べき様もかれれとあせり教もふありぬ魚の渾小上もあせり馬の子は樓と離
ちふりりとあせり天上の五妻も人間小つくとあせり同北二日主上閑
院より内裏小行幸有り内侍所神璽の官廳より大明殿へ渡りしは
三箇日臨時の御神樂成行れ三條大納言實房卿参り大外記頼業と召
て源頼朝の前内大臣追捕の費小從二位小叙口はへき由内記仰せ
宣言とて下され頼朝奉位正五位下也勲功の階成誠の常例とて同く

頼朝我經不和

同五月三日内大臣實定卿作らるる平大納言時忠先帝に一族謀叛の臣と
同意せしゆ系其罪輕の故猶も前内大臣宗盛内侍所と抱既了
入水の心成再三て先願上小捧く内侍所の神鏡を都小返入るあれ微忠に
何とぞとて死罪と免せられ流刑不定とて此時忠卿の子息讀中將

時實判官の宿所迄くわたり時忠中将小詰て云散すは元書物を入る
皮篋一合判官のふふられたるの状も録倉小札の横を以て多く
我身も先通羅羅と秋元申する中將あれとて小計ひ申す下平春
判官の情ある女がみあつたを愛せしむるも身小成ぬれ
若じきふらぬ親あり給へりかど情ともひけしはしつと時忠卿涙を
もくも流して我世小なりし時忠女御后も思ひておとくのふの縁と未
ゆりしとていほしそ袖を顔小あひを中將も涙をて今之田妻が早疾
やうゆれ時忠つ娘小斜あは者しとて向ひ中將も申入ぬ内々
風がしる判官令色に迷ふなりとて逆小逆ぬひ然り一年の長あやと
清くぬとやふ小跡美しと情ありて花やうる娘君判官も志深く思ひ
あはれ本妻河越太郎重頼が女も有らぬも是とは別の方後一考中將も
謀りしとて遠くは良相副く後の文箱の事申入りぬ判官封を披る
返し送る系大納言大不悦く坪の中ありぬを横きたる何事なる
何り人悪まども日記を聞下しこれを平家の北國西國の合戦小滅ひぬ
前内大臣宗盛以下を多く虜れぬ今も國も鎮て人の付来も煩ふ都
貴賤安堵なりぬれ九郎判官神妙也とて法皇斜あは思ひる浴中の
男女もあはれぬ世も侍とて録倉も聞ぬれ源二位頼朝の宣ふ
けの義經の高名を何事や頼朝帷幕の中は壽をりぬ勝平次子里
の外小駈一軍旅指登してあや平家い七びく今天下成穩ぬも九郎も人
して争世とは鎮むべきとれ小法皇の赦慮も心悔ぬ人のつと小誇り世と我傳
小計ひるさむつり一人も多き時忠も誓ふ成ぬかの大納言と持ぬも
謂は又世も思ひをふし時忠が九郎を誓ふ取も不思議也此傳ぬ九郎
録倉下りても過分の事とも派計けんを存外くと宣ひり終始中は
又世の乱さぬ成ぬと私諾る

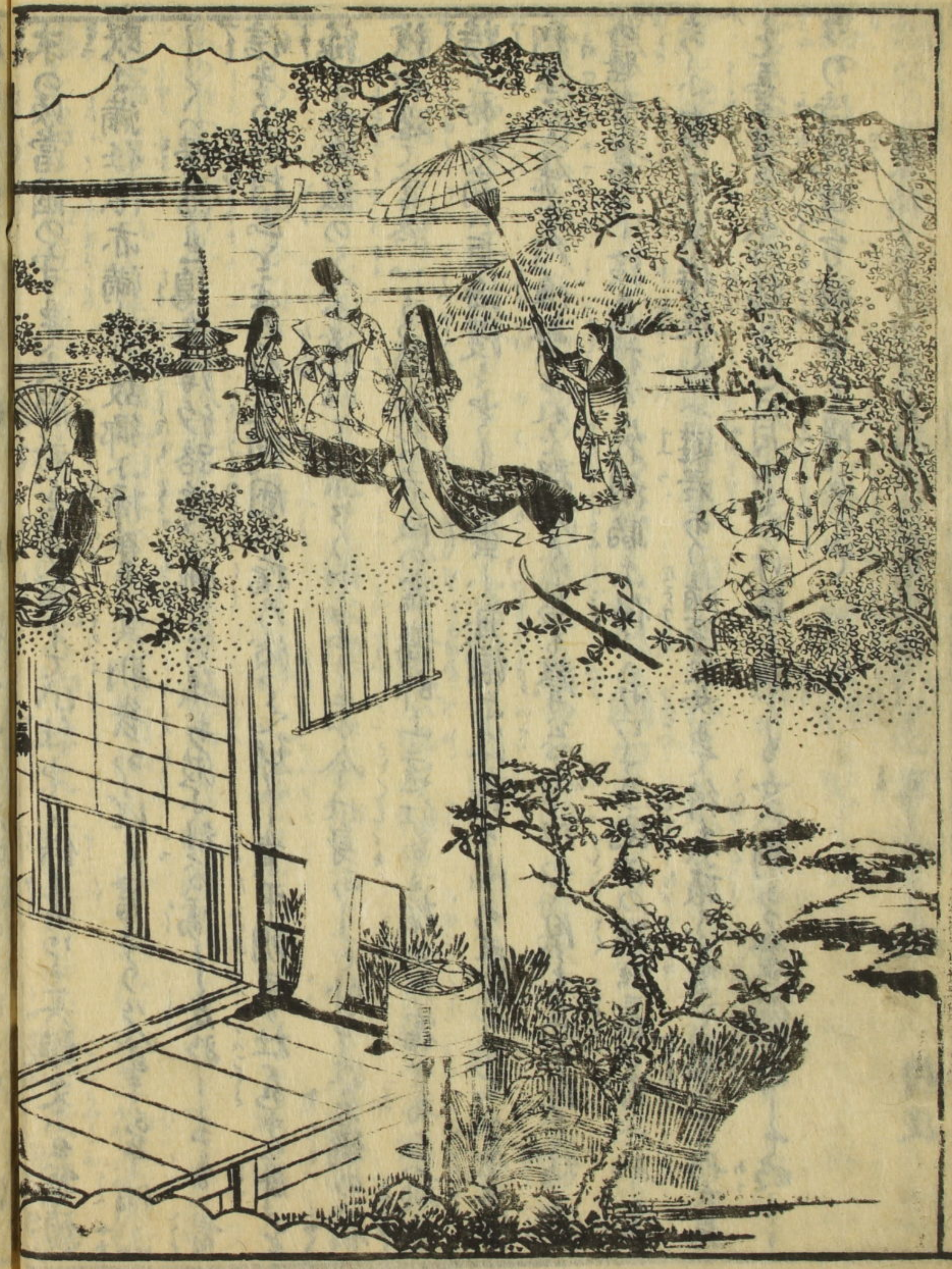
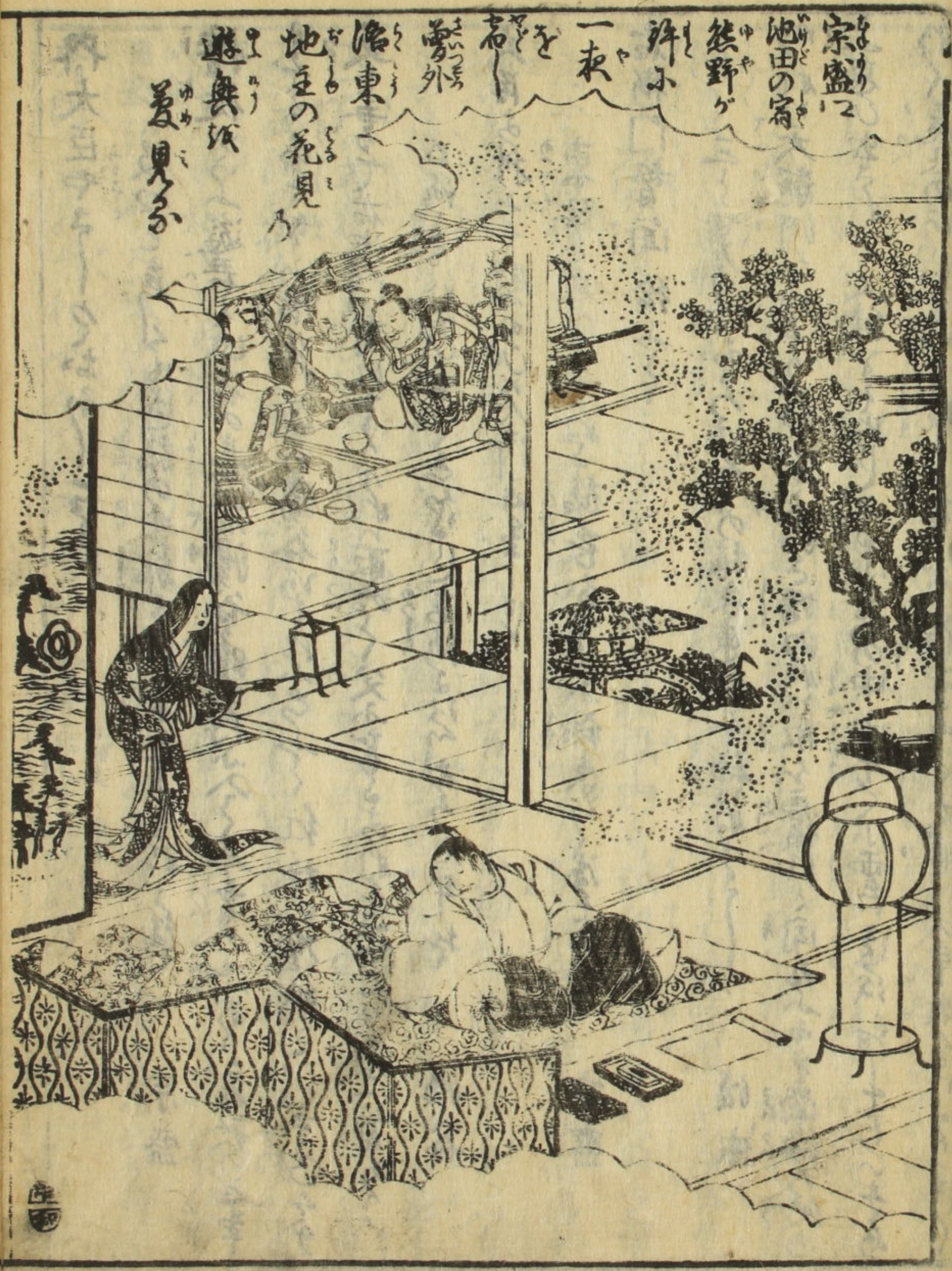
宗盛東閣下向

前内大臣宗盛父子美濃守則清已下録倉下向も下りて都をむく

相坂の関ふらるる都の方々顧みひて流るる内も隔也と流るる袖の東
路やいふぞいふて是れは山科とて神々人行とて思ふもあかしと蟬丸の古跡や
宮を果屋も果もいふは關山園寺打き關のいふのれこれ面影の憂旅
洛六津の流や打出の浦粟津原や南ふはむう大友皇子清見原の天皇や
我ひ大友をいひて敗軍を流す所は也の湖面見渡せば跡定めは蜚小館世
憂我身小くいひて勢多の長橋裏々や踏あじ野路の條原を江行の洲の河
原 山ふり果三上嶽を右も以見とて鳴橋のり駒とてや免ひはれふらふ
鏡の宿小者ぬ武佐寺通く老曾は森小野の細道を拵の醒井の宿を足
いふ本屋原の岩根より流る清水凍々や心細くはるりたる美濃國
山ふり流る細谷川の水の青流くそく流る松吹風ふり流る日影も速き
本の下園關の萱屋より板庇年歴もりりて覺る枕瀬川ももりりたる
と宿も遅ぬれ尾張國熱田社小者のふ此明神とていふ景行天皇御宇に
迹を留え和光の惠を垂るふ一條院乃御時大江雅衛といふ博士長保
末の頃當國の守り大般若を考寫しては社々供養は其願文を我願
既満任限亦満る故郷小帰登る其期あはれと書るりらん早も浦山
しく賢いよ鳴海浮汐路遙く眺むる磯歩波小社公禰いふ形も青
信を二村山とていふ三河國八橋乃渡りていふ業平朝臣の社を哥を
詠いかれ飯のうへ不渡はといふりてき今れ身ゆいと外は矢橋の宿
我打過て宮路とも紙ぬれ赤阪の宿高師山遠江の橋本の宿小者の眺を
持小橋れ南の巨海漫々として蜚小舟浪る北を流る流るて人屋界ふ
列する様うの浪繁れを群居る鳥も聲忘れぬ風と高の舟を旅客
の睡覺易く演名橋の鈴駒駒ふ付ておけり池田の宿は長の家今も
あふ宿も果侍従といふ遊君あり情深れ女也終表旅り憂と慰むる内大臣
も憂身のいふ旅もいふ目もかけ流るぬれも女の前も余も副助とて
り侍院曉方殿申て帰るて

東路せんうらまやれぬ故ついでふきりん 侍従

宗盛は
 池田の宿
 然野が
 汗ふ
 一衣
 帯を
 外
 浴東
 地主の花見
 遊興
 見ふ



内大臣やきくおろし

板のそとよりほは結の中林をほのめす

侍従少輔の遊君をば宿の長者湯谷の内へ今宵の沖あり

まてもあまやふ湯たれい母の湯谷のほふくく紅梅の檀紙

文をききて右衛門督にきりぬれぬ

湯谷

大臣おれお慰ぬひり

宗盛

右衛門督御給

宗盛

上思ひ出されく又袖とぬじなる小衣の中

形く尾上のりしもいと冷し

宇津の山ゆを成ぬれぬ

小町田子浦を過りて富士の高根の白妙の時

漫々く遠帆並列り

千本松原おろし

着小も舟侍の溪川

瀧の音もゆるし

まの學方慰ぬれ

て二門の菩提を吊ひ

少い西助の御命

流せし海とも

日教経ぬれ

屠助の羊

行小あ

魚乃令

源頼朝平宗盛對顔

同十七日九郎判官義経平氏の人を相具して鎌倉小下着あれ源三位頼朝の對面有あれもひと言ふく打解るる氣色あり我往も思ひの外小平遠く合戦の事申出さる小及むるを前内大臣宗盛の座に居る座を儲きり頼朝の藤中小坐して比企藤四郎能貞を使として申されり平家の二門小於これの意恨を存下まはせぬ専禪固の恩言小依く頼朝が死罪を宥られ争の遺恩を忘れぬ小及むるや休むも退言もも頼朝も宣旨致事家の同敷意小背き難き小只勅使小隨ふの計之柁源平兩家の禁庭の守護之其詔小違ふ者いふを辨罪を是むるの制度之此及圖る見参し事不思議の至る事と能貞大臣殺の前。進と逐ふ申上れを宗盛一が居直と敬恭せられり國々大名小名列を礼し左右小別を並居きり右の智と申しと居事とむるは是言し多しは書か代々朝家乃守護四海安堵の爲小及む賊軍の朔敵を鎮免臣を安撫其勅切の勢あり

よりの大政大臣小昇は洪恩の賞と賜やく左右の大將を觀と身の候あきせども朔敵乃彼を蒙る幸あれ私の耻小あり天令限ありて運を流さあれ也芳恩ぬ多き首伐がられよと立派小言をあれを聞武士之言の伴神妙ありとそそ源神を長経はは父宗盛の源二位をむき敬尊し終り清令も助まのべき事と何ふ西海小沈まらして東國小耻とせしめふもねも令のれしたく嘲罵も多き人の身小定法かあれをむ時を將せありあ物を卑むとれ虜とぬるあれを杭る則を青雲の上小翔とせと抑子別を深淵の底小沈み用物虎となり用ひされぬ氣とあり又源とむく必しと大臣殺も限るに猛虎深山小あれ百獸震の馬又樵野の中にあまの尾を揺る食と求むいふ勇猛の大將あれどもめくのやくあり運をぬれを心も度どて時くありその我思われら大臣の首伐が事容易に流るる距離の上大臣の魚を並利刀成相具して内大臣又これ前小坐れりも清自言し終りの計畧あり大臣のいさめ終るるやりの人悟る事もあく其候小入て

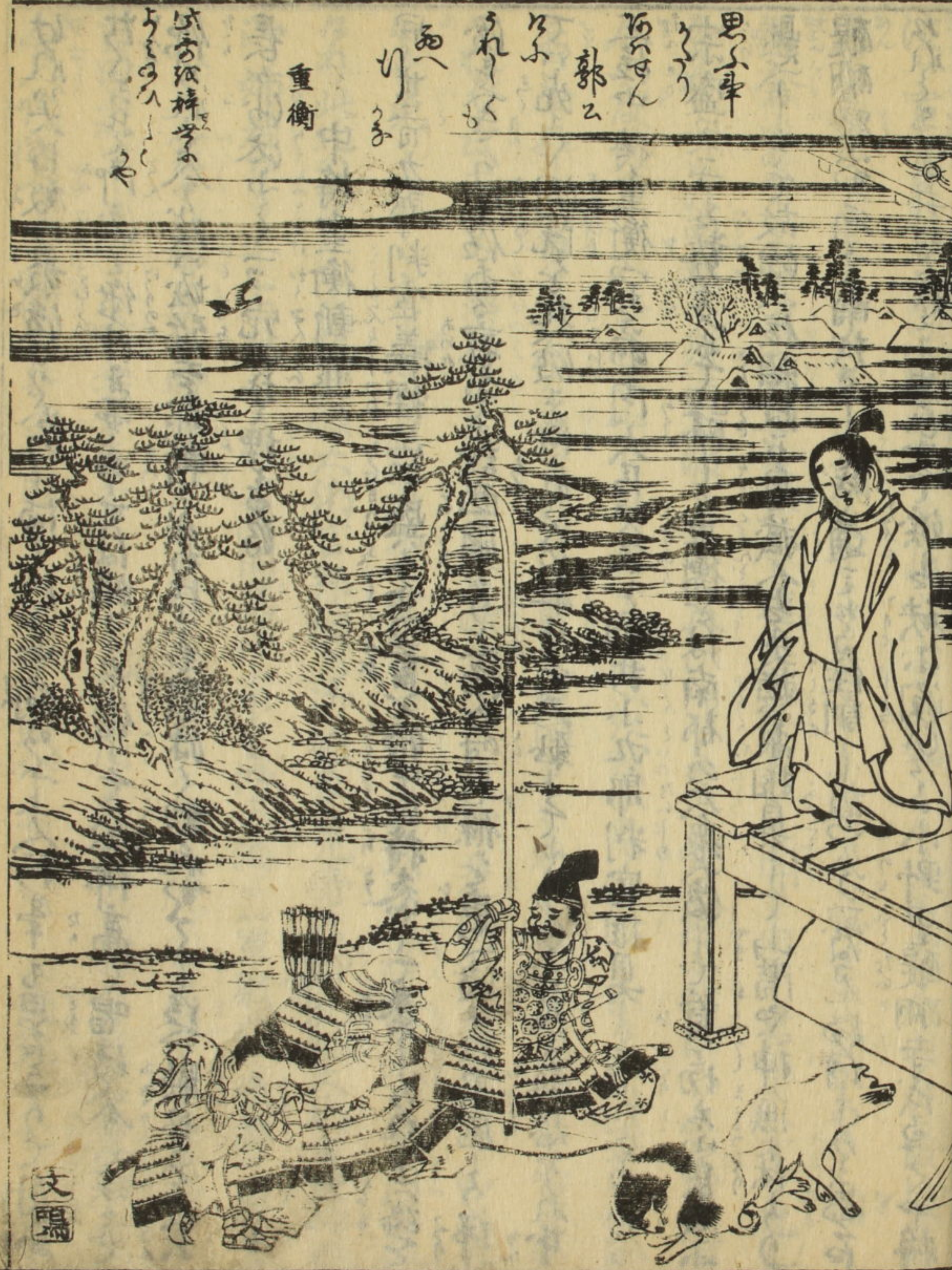
のそむひは清宗のちを思ふれども西海へ入るる一経そ只父の先途覺束
形しそ今更先立き小非俗と思へれば自教一経の左右の武士待ともく自
害しそいさるれば内大臣成瀬は権守と改名して九郎判官と改めしなり

宗盛父子斬罪

同平家家の國人國之流刑をて由官府をとり上卿を源中納言通親
なり前平大納言時忠の能登園子息前左中将時實を因防國內成頼信基は
備後國兵部少輔尹明と出雲國熊野別當法眼行明常陸國二位備前全真の
安藝國法勝寺執行能圓備中國中納言律師良弘河波國中納言律師忠
快の飛騨國等追立の使ありて遠流小所せられたる六月十六日伊勢天照大神宮
勅使あり又前内大臣父子并二位中将重衡去る九日義經不相見して上洛せる
後愈々謀せ給はる思ひまゝに又都へ歸り上られたるに迷ひ給はる
國を驛々も過て尾張國野間内海に放義朝とてひる所ありて義經一の重後
宗盛といはるるを宗盛といはるるを宗盛といはるるを宗盛といはるるを

右衛門督とく心傳く平氏の正統なれ頼朝小とく見せ後系とて頸を切
流さるるを思へば父の歎はよけれはくとも宣つる只道より内大臣も
念佛と勸先我もむと稱ひあり日教経のまに廿日近江國篠栗
者小者廿二日勢多や大后殿も右衛門督と各別の所を宣つるに
限りては右衛門督の所も一ツ所小とて宣ひしそあはれ別せ給
ある悲しけれと流涙絶ふとゆは内大臣判官小作あはれ出家へ免
かたは力及ぶ傍の僧とて受戒最後の知識小せりや宣ひ其を
て金性房湛豪といふ僧を流し引導あり小内大臣流され敢は僧小
向つて宣ひたるは右衛門督といふ成ぬる人首と別らぬとも一ツ巻小
死かんと思ひ流さるるも形き平の悲しは西海の水を流さるる身せん
かく憂を成流さるるもみか右衛門督がむとて泣かむ知識乃信申あはれ
今世放く其事思召べうは最後の清有孫を見せたる人も互の御心中悲し
なりはれはくくそふ君も外戚の臣たり丞相の位を奪る征夷の將統る

天下の政は上人を輔導一下萬民を照臨に世をいつく修むる事日月の如く一氏の悪れを半雷霆の如く一勢派衆人の上小失りぬ命と匹夫の事小棄たれ樂盡悲来るは謂物盛んぬれ必甚るは理之更に當時の災殃ふあはれみかかれ亦世の業報亦任るあはれぬくも世界の天衆を以て退及の悲に遇ふ得道の羅漢も必滅の理を免れず秦始皇后と極ゆるも驛山の墳小埋漢の武帝命惜やも杜陵の吾朽ぬ青賢親經ふ我我心自空罪福無主觀心無心法不住法と説けり我我自空ぬれ罪福全主か一靜小心を觀むに定る事邪一諸法の相を達するは小一法として法の中にある成見はそれと善惡共小是皆世出同無を觀むる佛の知見小相叶ふ事ぬれ何事も始終有べしは業花名圓之宅の樂重職官位も炎中の勇に於れぬ為小還く苦埃招くは終くこめ小必憂城懐く妻子眷属の恩愛苦海の波を起し我執愛憎の邪見放逸を劍を鋭く嗔縁逆縁共小生死の妄染ぬれ自身他身も火宅の炎より一切有為の法を悉く夢の如く幻の如く水月鏡影の喻はゆるぬべし未淨眞覺恒處夢中故佛説為生死長夜之説も城小眞覺のひらけも無明の長夜の如く妄想の憂悲一に争時す幸か否か一而と弥陀如来の大悲願を發して一念十念共小導へん誓ひひらけは願億々萬劫も聞かぬ世を生ず小と値りしをいつく天上勝妙の樂小誇るも佛は小遇れぬ悲しむ壁に卑賤孤獨の報を濟かとも三寶小歸依を幸とて君先世の惡憎小言て今生の誅害小値りて餘念と止く一筋小念佛を拈て衆苦永く隔く十樂此小莊に淨土(生人)一心治定してかくも疑ひぬふく教訓一なる三淨一五戒を授もて念佛を勅する内大臣然るべき知識形として思召西小向の夢と會せ餘言成止く念佛三百返計も唱りて橋内右馬允公長劍と拈側く後へ廻りぬ大臣教念佛を止く右衛門督も殿小や宣ひぬれ詞のいまま終る小首と前小を爲ふるかの公長平家重代の家へ新中納言の許小稱夕個候の者より身を願世を渡らんと思ふ事悲しむれと流し流し其は上人右衛門督の許小行向ひて戒を授もて攝る教訓一念佛きりぬ



思ふ事
 うつら
 阿のせん
 郭云
 乃ふ
 くれ
 西
 重衡
 以ては様
 うら
 ぶ

文



平重衡卿
 南都の
 大佛殿を
 兵火に亡
 り科ふ
 南都へ
 渡され
 本津川の
 やり此
 過堂
 殊せれ
 ぬ人

ければ大后殿の最後いりたりしはるや向ふ上人何事も思ふよりて月あ
ちくまは御後王御法色を申せば嬉しく作て念佛高く唱はく今疾をせ
作れば今夜の城跡を斬るなりはも罪深く翻れりては六骸骨と成公
長が少汰ふく一ツ穴を掘り埋もる

中将重衡斬罪

同廿二日九郎判官義経の宗盛父子の首と洛中に持参して奏しければ大略を
後まきより一任ある哀あるが西國より上洛の討七條と東に渡され東國より帰
てい死く洞院を北に渡され死くの耻生て入恥とせりく小倉を無慈悲に
三位中将重衡は前内大臣父子と相共小九郎判官相具して上りてあはれ
宗盛父子を勢多中誅し重衡は南都の大衆に渡して首と切を良辰小
懸へしめて故源二位頼政の息藏人を吏頼兼相具して山階や神無森より
醍醐路小のりく南城よりて通る住馴し故の今一たびは月一々思ふ
これくも雲井の上を小思ひを涙と袂小割ひたる小野里醍醐寺に中將

泣き宣ひければ日頃各情をわすれぬ事の嬉しき云ふがう一同く最後
恩を世のまき事なり年来相具しる者も小迫りて日野とて所小ありと聞く
鎌倉小ありし時も風の便を多きも遣して返事とも聞かやと思ひくも免し
かされたり南都の衆徒小渡され再び帰て来り身小非れりれをの空
今一たび見りて人もせむ思ふいり有れば我小まきの子もかたはは世小
を半取し責てあぬを許し流り黄泉の障をわく安く行なひや宣ふ
これく武士も遠岩本にあきれば涙を流して何は是ほやの事か若くは元
少て免しければと合を悦ひぬる北の方日野を夫二位の許へ尋入る案内され
たり此北の方と申し故五條大納言邦綱乃清娘也先帝は御乳母大納言典侍の
清姉君なり平家都を流し時同西海小下り檀の浦に軍取れて後都に帰る
あとも家々の都流の時焼亡ひぬるを念ふ女院小付進せりて
吉田小ありければも叶ふべき松あられを日野小流せ悪くたひひる石童丸とて
舎人内小入る重衡は東國より来り成へりては南都とて

者こそ衆徒の手渡され侍の堅固の武士小臈を乞て立寄侍之今一度身を
らむと云へぬれ北の方物を乞ふも打浦と云ふは侍の心も足らぬと聲指
の直密小袴着るる夜思て操小をりて居ぬはるはれい後う渡り入てせ
ゆくと直入るる聲を聞かふと目を眩さ心も消て袖を脱ぎ置て後ひはる
大納言典侍一祈布かひく走り出く共小啼く泣く三位中将半椽小高の御座
打浦とて北の方小目とて人合せて互小いと思ひ重りて言葉さあつて小北の方
紀直てくれと語りて重衡の手に城の内へ入るる物を進めりぬ
とも物塞つて喉せぬりて御も刀口れと責て志を見んて湯漬成勃め給ひは侍
志はくへんかれとあれと責めて小袖二白帷子取具してなうたれと練舞の
小袖の垢付るるを脱替ひ北の方あれを取て胸小あて敷小當て後ひは三位中将
もひの着るる小袖かかれ最後の着替と思召るる小袖を脱ぎ替へるる處
涙のこぼりたりと

おたのむるも今い何せんかをわたりけりてとせおひと

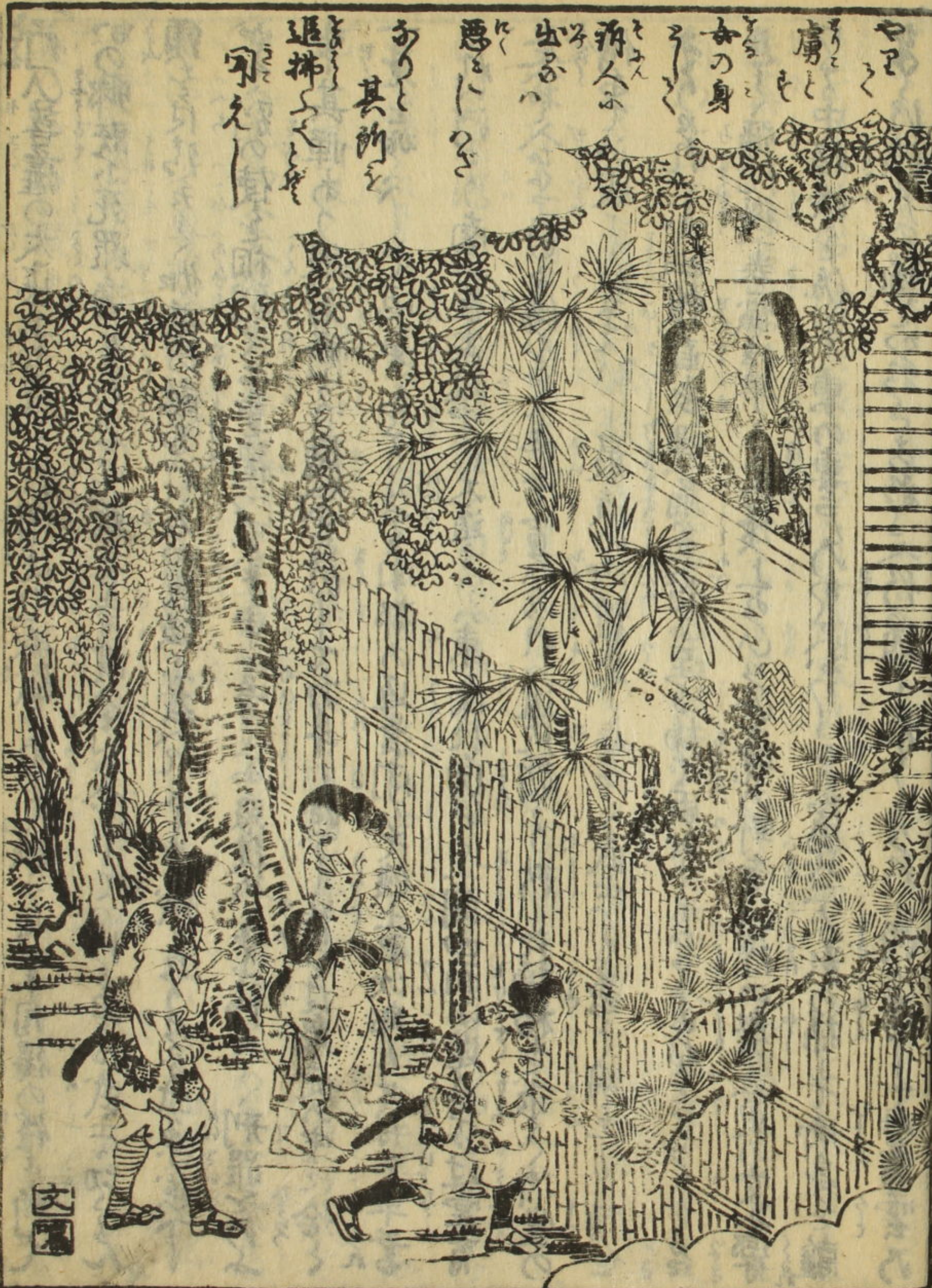
北の方もかく

たのごとく契とらちの物とて後の世までも忘れさる

三位中将言ひもれ去来は去いも成るるに身の一門の人を多きと責めての
罪の報小重衡を人生廣て系鎌倉小臈され終つて奈良法隆寺の中に引出され斬下し
やて経路のわが有様あれの中く由なりと云ひはるる命なると一皮見糸糸も小
非が年奉の情をぬるひ小任くかくと申はるる命の所人半も只かを限り門足者
てへかこひぬる上は残止く後の世と吊るる者も侍はそれを今更恨る小非
日本第一の大伽藍を乞へる罰重く阿鼻焦熱の炎兼て想像も苦くなん
いふ所人育操小かたれも忘れぬて吊ひぬるる人の中にか身小相馴れさも
前世の流るる契もあはれ侍も免後世も忘れぬと云ふ出家ともして契も利せ
むやせ思ひはる小持れも免ありとて又涙もど咽きな侍時跡もや堅固の武士
立駈けの中將と申せぬく一を契あはれ本世も見んとて立出ぬ北の方人直も
侍は操の際まであひ侍りて泣ひぬる中將の馬小乗ぬひくも涙ふれぬ

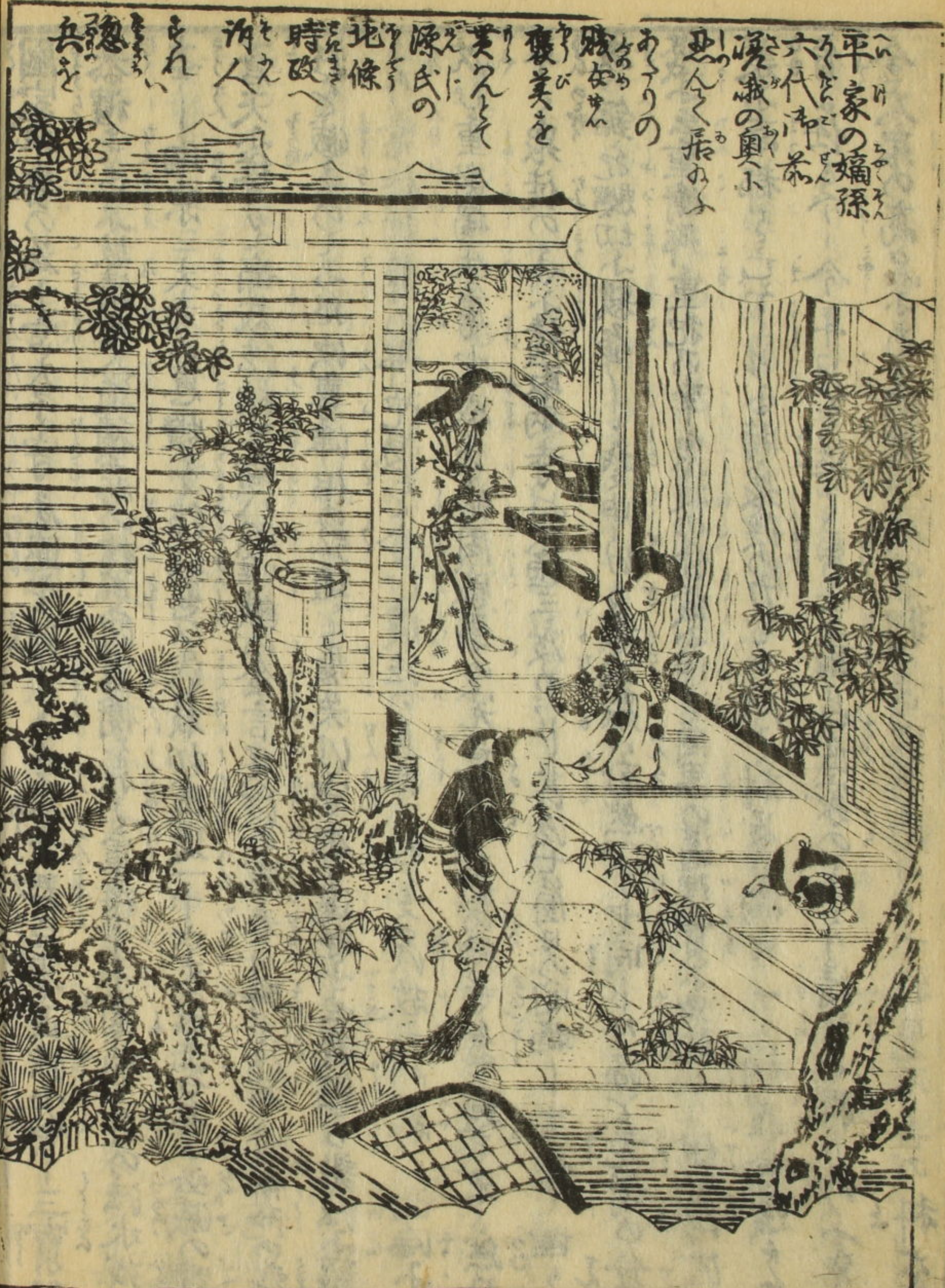
行先も見(は)其身を南都小向(む)心(こ)を日形(ひのかたち)ふそ止(と)まらるる大納言(おほののり)典侍(のり)を
付(つ)くも(も)か(か)り(り)ぬ(ぬ)く(く)き(き)ぬ(ぬ)け(け)き(き)も(も)それ(それ)も(も)遠(とほ)れ(れ)引(ひ)纏(まと)む(む)我(わ)師(し)の(の)長(なが)き(き)別(わか)れの(の)道(みち)
は(は)ま(ま)に(に)悲(かな)しく(しく)思(おも)ふ(ふ)ゆ(ゆ)め(め)と(と)武(ぶ)士(し)を(を)み(み)か(か)杖(つゑ)を(を)海(うみ)に(に)お(お)ろ(ろ)す(す)本(ほん)幡(ばん)の(の)園(うゑ)野(の)を(を)伐(き)り
打(うち)ま(ま)く(く)宇(う)治(じ)橋(はし)を(を)も(も)誠(まこと)平等(びやうどう)院(いん)を(を)心(こ)より(より)小(こ)伏(ふ)せ(せ)屠(と)所(じよ)の(の)羊(やぎ)牝(め)近(ちか)所(じよ)新(あらた)野(の)
池(いけ)も(も)打(うち)破(やぶ)れ(れ)る(る)光明(くわうみやう)山(やま)の(の)名(な)存(ぞん)の(の)前(まへ)も(も)着(き)る(る)治(ち)系(けい)の(の)合(あ)衆(しゆ)小(こ)高(たか)倉(くら)宮(みや)流(なが)れ(れ)身(み)
中(なかつ)て(て)亡(な)し(し)ぬ(ぬ)今(いま)我(わ)身(み)乃(の)上(うへ)と(と)終(は)つ(つ)たり(り)ら(ら)る(る)大(おほ)六(む)堂(だう)乃(の)色(いろ)淡(たん)過(か)の(の)ま(ま)り(り)源(げん)三(さん)位(い)
入(い)道(だう)一(いつ)門(もん)當(あた)り(り)當(あた)り(り)の(の)名(な)喪(な)れ(れ)其(その)亡(な)し(し)魂(たま)の(の)跡(あと)を(を)人(ひと)今(いま)い(い)ひ(ひ)つ(つ)り(り)小(こ)替(か)り(り)長(なが)世(せい)の(の)習(なら)ひ(ひ)を(を)
是(こゝ)非(ひ)なる(る)三(さん)位(い)中(なかつ)將(しやう)の(の)本(ほん)津(つ)河(が)の(の)名(な)不(ふ)着(ちやく)ぬ(ぬ)と(と)土(つち)肥(ひ)次(じ)郎(らう)使(し)者(しや)我(わ)南(なん)都(と)へ(へ)ま(ま)り(り)三(さん)位(い)
中(なかつ)將(しやう)重(おも)衡(かう)を(を)丹(に)南(なん)東(とう)也(や)誅(つゐ)せ(せ)ら(ら)る(る)は(は)き(き)や(や)ら(ら)る(る)南(なん)都(と)の(の)兩(りやう)寺(じ)と(と)七(しち)科(か)小(こ)門(もん)之(の)衆(しゆ)
徒(た)の(の)小(こ)後(ご)違(ちが)ひ(ひ)を(を)き(き)由(よし)右(みぎ)大(おほ)將(しやう)源(げん)三(さん)位(い)家(け)の(の)中(なかつ)知(ち)小(こ)任(にん)く(く)今(いま)日(にち)寺(じ)を(を)ま(ま)り(り)後(ご)向(む)け(け)
寺(じ)境(かた)に(に)具(ぐ)足(そく)入(い)る(る)を(を)境(かた)外(がい)小(こ)於(お)於(お)死(し)し(し)申(まを)たり(り)あ(あ)れ(れ)東(とう)大(おほ)興(かう)福(ふく)
兩(りやう)寺(じ)の(の)大(おほ)衆(しゆ)貝(かい)珠(しゆ)を(を)鳴(な)り(り)て(て)大(おほ)佛(ぶつ)殿(だん)の(の)大(おほ)庭(てい)小(こ)會(かい)合(ごう)して(して)會(かい)衆(しゆ)わ(わ)ら(ら)若(わか)大(おほ)衆(しゆ)多(おほ)く(く)集(あ)る(る)
會(かい)して(して)議(ぎ)す(す)之(これ)を(を)抑(おさ)め(め)我(わ)日(にち)本(ほん)神(かみ)願(ねが)ふ(ふ)其(その)袖(そで)を(を)重(おも)く(く)尊(そん)敬(けい)し(し)和(わ)光(こう)の(の)塵(ちり)を(を)同(どう)し(し)り(り)

國家(こくが)平安(へいあん)の(の)為(ため)上(じやう)宮(みや)大(おほ)子(こ)守(まも)り(り)屋(や)連(れん)を(を)討(う)ち(ち)し(し)り(り)以(もつ)来(こ)君(きみ)臣(しん)專(せん)正(せい)法(ぽう)小(こ)政(せい)三(さん)寶(ぼう)を(を)
恭(こう)禮(らい)す(す)小(こ)故(こ)清(せい)盛(せい)入(い)道(だう)積(ぢく)惡(あく)の(の)伴(ばん)所(じよ)重(おも)衡(かう)を(を)以(もつ)軍(ぐん)將(しやう)と(と)園(うゑ)城(じやう)三(さん)井(い)の(の)法(ぽう)水(すい)成(じやう)
お(お)り(り)南(なん)京(きやう)一(いつ)大(おほ)寺(じ)の(の)惠(ゑ)燈(とう)を(を)消(け)し(し)悲(かな)ひ(ひ)最(さい)初(しよ)成(じやう)道(だう)一(いつ)十六(じふ)丈(ぢやう)の(の)聖(せい)容(よう)忽(いつ)小(こ)必(ひ)滅(めつ)の(の)煙(えん)
蒼(そう)天(てん)小(こ)從(じゆう)尊(そん)り(り)痛(いた)哉(や)法(ぽう)相(さう)三(さん)論(ろん)八(は)不(ふ)唯(ただ)識(し)の(の)金(きん)言(げん)表(へい)没(ぼつ)の(の)露(る)春(はる)日(にち)野(の)小(こ)滴(てつ)も(も)會(かい)佛(ぶつ)池(ち)の(の)教(きやう)
法(ぽう)を(を)滅(めつ)す(す)の(の)小(こ)犯(はん)次(じ)專(せん)淨(じやう)侶(り)の(の)弘(くわ)通(つう)と(と)慶(けい)失(し)し(し)守(まも)り(り)を(を)違(ちが)ひ(ひ)し(し)提(だい)婆(ば)を(を)誅(つゐ)法(ぽう)小(こ)報(ほう)
り(り)常(じやう)任(にん)諸(しよ)尊(そん)の(の)佛(ぶつ)陀(だ)眼(がん)を(を)會(かい)む(む)護(ご)法(ぽう)の(の)善(ぜん)神(しん)怒(いかでか)を(を)ら(ら)る(る)故(ゆゑ)一(いつ)門(もん)悉(しつ)く(く)西(せい)海(かい)小(こ)
沈(しん)む(む)重(おも)衡(かう)獨(どく)生(せい)虜(ろ)や(や)成(じやう)平(へい)修(しゆ)因(いん)感(かん)果(か)の(の)究(きゆう)竟(けい)あ(あ)り(り)て(て)の(の)卿(きやう)寺(じ)を(を)小(こ)廻(わい)り(り)來(き)り(り)然(しか)り(り)
早(はや)く(く)衆(しゆ)徒(た)の(の)小(こ)清(せい)取(と)り(り)兩(りやう)寺(じ)小(こ)大(おほ)壇(だん)三(さん)度(た)め(め)ぐ(ぐ)し(し)其(その)後(ご)七(しち)箇(か)日(にち)の(の)間(ま)隔(かく)一(いつ)生(せい)死(し)を(を)埋(う)め(め)り(り)
或(ある)小(こ)鋸(こ)を(を)切(き)り(り)殺(ころ)す(す)身(み)を(を)我(わ)申(まを)ける(る)若(わか)大(おほ)衆(しゆ)い(い)ち(ち)然(しか)り(り)一(いつ)也(や)同(どう)ト(ト)り(り)所(じよ)と(と)老(らう)僧(そう)の(の)會(かい)
衆(しゆ)小(こ)重(おも)衡(かう)卿(きやう)重(おも)犯(はん)の(の)事(こと)衆(しゆ)徒(た)の(の)會(かい)衆(しゆ)小(こ)同(どう)と(と)因(いん)果(か)の(の)道(みち)理(り)實(じつ)小(こ)必(ひ)然(ぜん)なり(り)但(た)し(し)一(いつ)法(ぽう)
兼(か)小(こ)南(なん)都(と)を(を)こ(こ)り(り)ら(ら)る(る)時(とき)衆(しゆ)徒(た)の(の)力(ちから)と(と)り(り)討(う)ち(ち)ぬ(ぬ)る(る)擱(こ)ち(ち)を(を)刑(けい)罪(ざい)會(かい)衆(しゆ)を(を)
旨(ち)任(にん)ま(ま)り(り)今(いま)年(ねん)月(げつ)を(を)送(おく)り(り)勇(ゆう)士(し)小(こ)取(と)り(り)武(ぶ)家(け)の(の)手(て)より(より)請(け)め(め)る(る)罪(ざい)小(こ)り(り)小(こ)事(じ)
全(ぜん)大(おほ)衆(しゆ)の(の)高(たか)名(な)小(こ)あ(あ)り(り)就(しゆ)中(ちゆう)修(しゆ)學(がく)利(り)生(せい)の(の)窓(まど)内(うち)り(り)て(て)邪(よこしま)見(み)不(ふ)善(ぜん)の(の)科(か)を(を)



やま
 膚
 女
 の
 身
 出
 入
 悪
 事
 あり
 其
 所
 退
 拂
 用
 え
 一

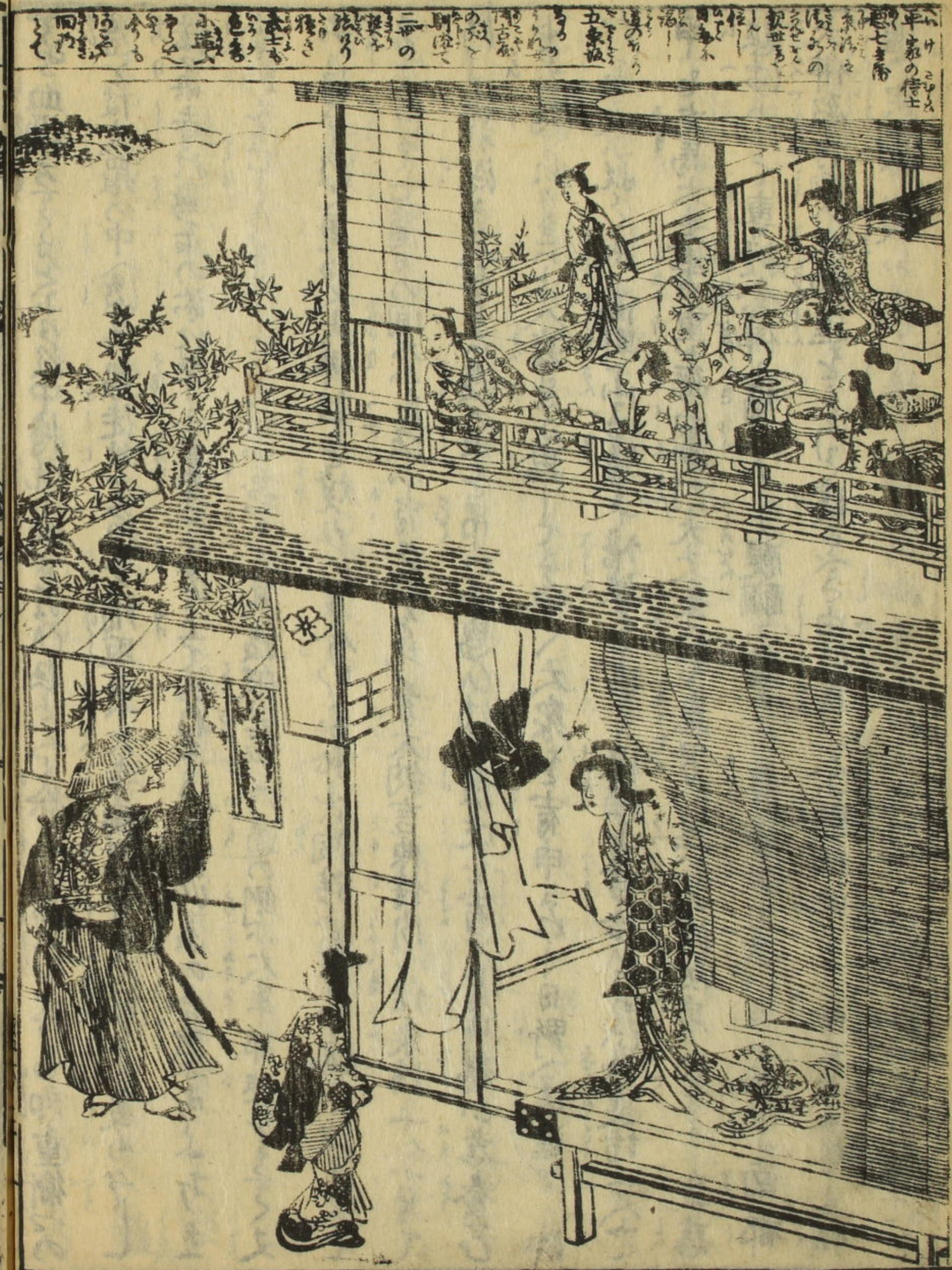
文



平
 家
 の
 嫡
 孫
 六
 代
 源
 氏
 の
 孫
 悪
 事
 あり
 其
 所
 退
 拂
 用
 え
 一

文

行ハ菩薩の大悲小肯され僧徒の威儀小ありじ誠小自業自得の儀所て
の卿既死罪過難れを然ふ寺院の内小舎りていけり也も武士切らん
頭をたげり多く伽藍の敵あれは小良坂小舎りてせ滅たりは家小東然下
也之別の使と相割く云重衛つの中申さう小衆徒の事小法多く刑罪とらふ
中其憚あり般若野より南へまひりてお斗とあべ一首とは衆徒の中に給く
一見を加へて返事とらうる南都の返事同ひて後土肥次郎と其目と早言
たれは河より南の在家北中に大通より東南に向ひて一間四面小迷りては堂有
是我を合さける湯をせもやせ宣ひられ近れ所より新れた桶杓を求り清堂の
傍中行水一盤洗ひ最後の清堂東と号く武士も多く用ゑり持せ
まらたれは小袖帷直衣禪扇笏皆小至る湯を取ちてまもあねをてくを召
ましく彌陀經一卷讀法早らう小後上りひは暁の野寺に鐘の聲五更の空小響
りる中将流を流し東の妻戸のわさかりは兵二入影の様も御身を離
まらた後戸の標とかりとあねは乃道一たれは小將と音して紫の雲乃
すも血煙まらるる小ふりれ中将既小斬たひひととと松名の声も小すも即重衛つ
首とは大衆の中へ渡り衆徒もあれを請取東大寺興福寺の大塔を三度めづりし
法兼寺に身居の所に竿小貫とさうく上てあねをさうは治承の合戦もあふおま
南朝を亡くたせいとてあふ小あふ其後般若野の道の側小大車都婆とさうく又
あにさうは身と人小大佛殿を焼たれ今も恥ま相残るあや涙を流そくと
多うりけり七箇目の間小良坂小肯たれを北小大納言典侍内と後乗坊上人小付て
けりも罪深き人あまの後の世を吊りや思ひゆる衆徒を宥て首成賜ひ孝養意
也と請れりきい上人哀せし思てさうく大衆を宥申されり日野へ送進せし
北小方大小松く即高野山へ送進せし増進をさうく追福を管給ひたりは後乗坊上人小
申と左馬大夫季重と孫右衛門大夫季能と息男と黒谷の法然房の弟子と救慈
悲法師とて専修念佛小備へ上醍醐小誓とて専憂世を厭ひぬはる小南都
大佛殿再興の大勅進とさうく彼とさう由法然上人小頼朝卿より命ありはれり弘
通の宗意小暇ありれり辞し申され御養子の後乗房小譲り給ひけりお物れを



東大寺大佛殿造管大勸進小補せられたる重光人々北の方より上へ小付て乞ひ給ふ
衆徒も宵きびく免し遣はる重衡の滅亡は月支東漸の佛教日域南北の靈場
成焼の故小冥衆其人を被せし神祇其身小崇となれ生るも恥を吾妻小書ひ
死て之骸を南都小曝は奈落の猛火思ひやるも我無慙おれ宗盛父子中將重衡も
斬き平將殘をかく亡びし山陽山陰四國九國穂なれを國を國司小従ひ庄を領
家の傳ふれ都鄙上下安堵せり同七月九午の舛小大地震あり此事時長明方
丈記中見たり良久々々震ひて夥しきと更あり同十二月小又地震あり
初の日より成初過せり白川の側六勝寺九重塔より初く破き傾き法勝寺も
阿弥陀堂園城寺の廻廊大内裏の廻廊殿舎其外神社佛閣すべて人屋も七顛
倒して全き一守也良嶽根本中堂の常燈も三燒を消ふり大師自石火を出り
炬しある一燈の消るるを法滅の期小非りて除時の災と覺たり又十四日小孫
坊小書ひのり堂舎の崩る音雷れり塵灰の揚る幸煙乃立ち小似り天文
博士系集りて占文輕かむと駭き申す諸宮諸院卿上雲客の亭も共小倒き

傾きりる入隙かき書ひられ車に召船小乘り控かりたる成其條彼三十條日も
書ひられ公卿僉議有く祈禱ありの由諸寺諸山に命は今夜の地震上古
未代也を類はれども貴賤駭歎り平家死靈亦く世の滅るる時節の死況
萬乘の聖衆玉體を西海の波底小沈め三公は大臣死骸を北關の獄門小懸すり
異國の例を知ら本朝の昔より卿相たる大略を流し頸と獄屋小曝す事は
世の中いづれ人々申あてり

女院入寂光院

同八月十四日除目行きて源氏六人受領もされ平氏追討の賞と聞下し其中小
鎌倉右大將頼朝の擧げらる九郎判官殿を伊豫守成賜るる院の御殿の別當
小成り京都の守護を被まべり侍十人附られたり判官思ひたる長経度々の
合戦小倉成塵芥の如く將へ既小世の乱き成鎮め父の歎を亡れ私の宿意を
云形に國家の大奉へおれ莫々の軍功小非りも拙も京師より西を給ふこと
は小僅小伊豫に國設官の地二十箇所知行せりとの右大將の祈存奉えり



女主人
 六代神茶の
 今とて
 鎌倉
 よりせり
 昭徳の
 叔
 松平
 文
 時政
 千里一鞭
 初原氏
 後平家
 為重
 僧真
 忍延
 六代君
 羅島



由

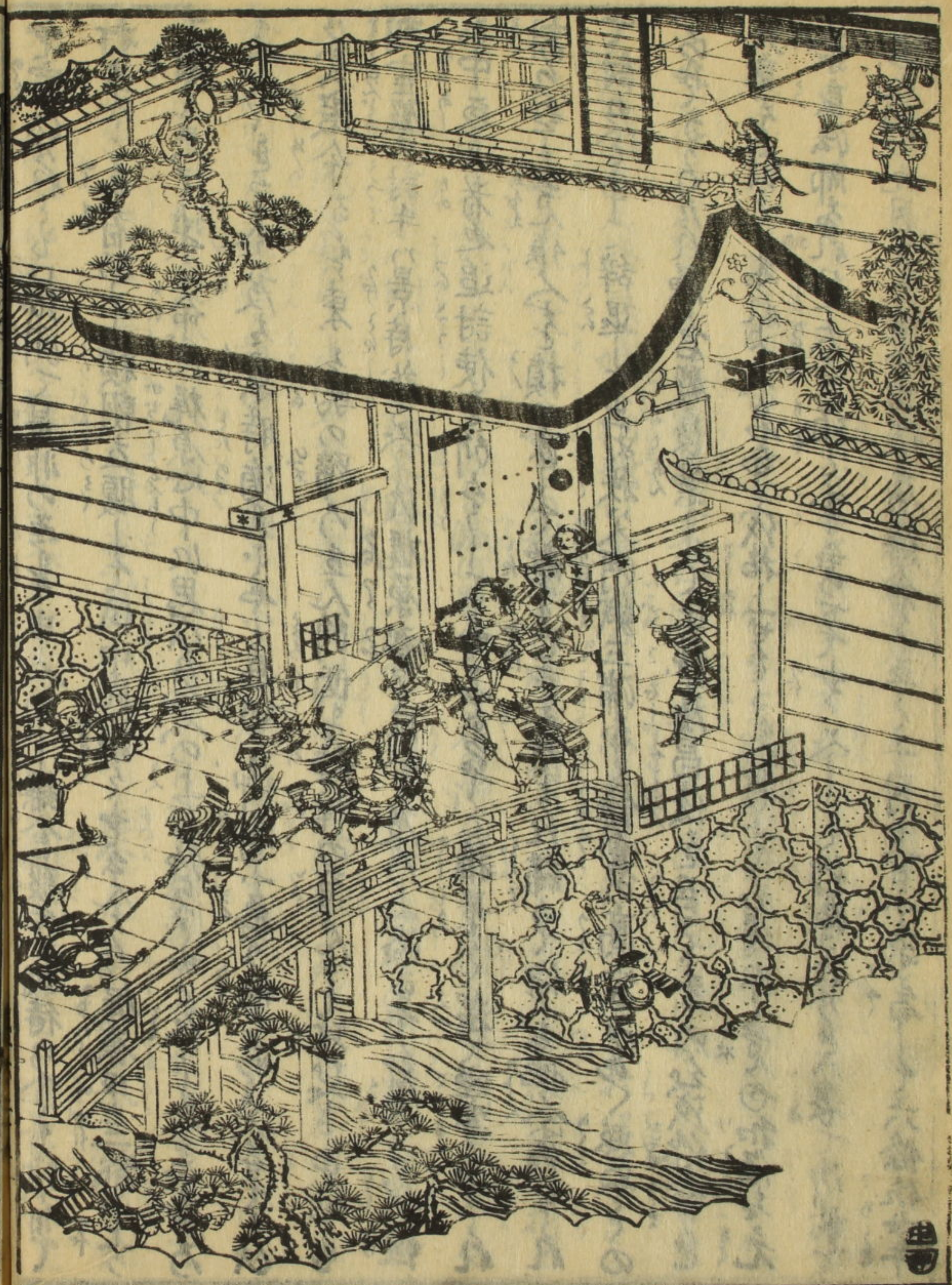
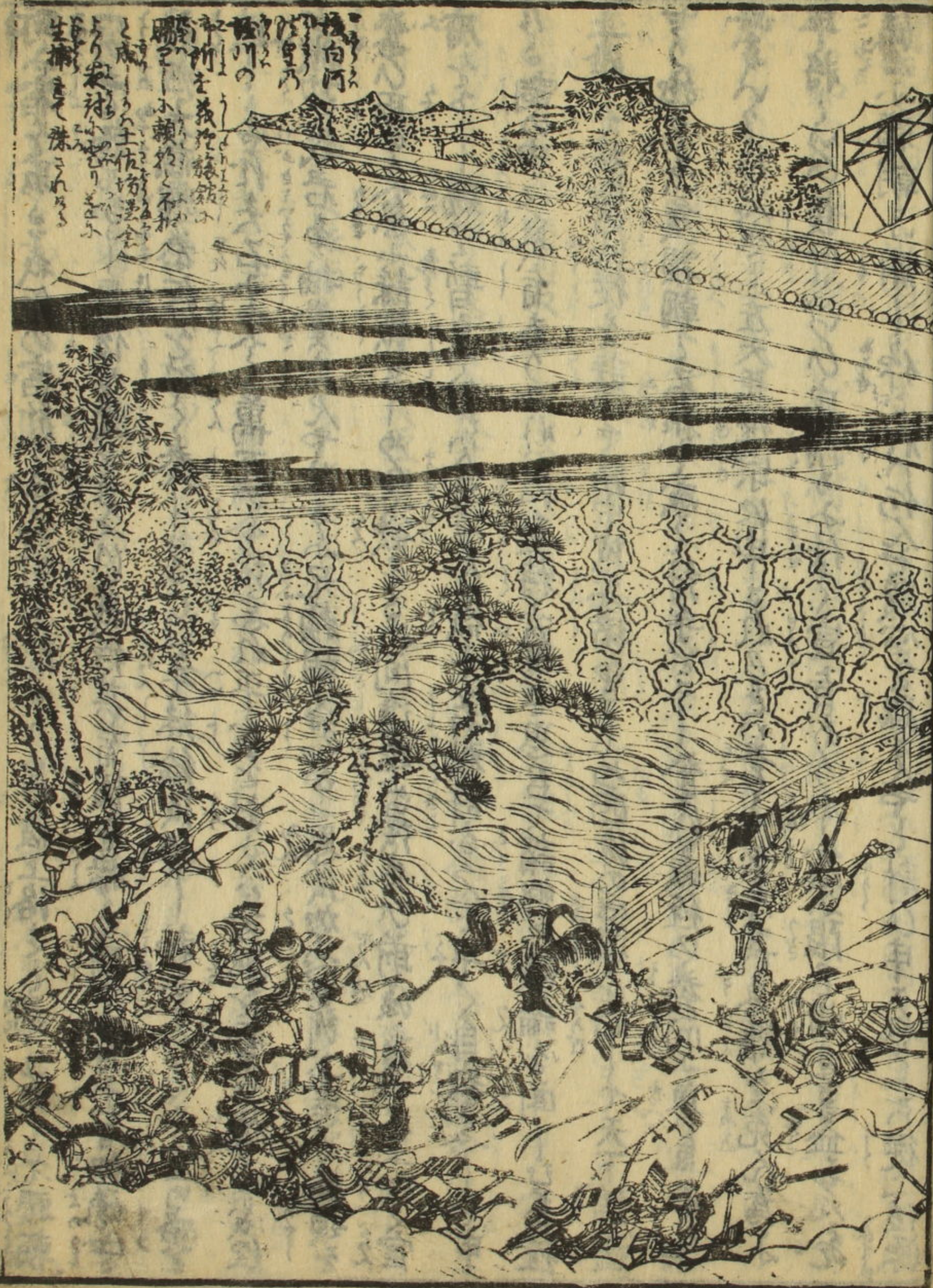
思ふれども重く思ふ旨ありて是より先終ふ付る十人の侍を善くむと合
たれを親の所勞子の頼むらむと東國へ迎ひしを判官いひて心傳と云ひし
相小右大将忽判官と討へて關東に據るの計ひありと云早京都小守
又何事のおんやと貴賤あかこふさめれあす時小月十七日改元有て文治
と云彌せしはされい建礼門院を洛東吉田とて御儲下せりひ御戒師長樂寺
の阿證坊印西上人とて聞えし清布施先帝は御道衣と引る其頃世の人の
猶ふい智惠第一法然坊持律第一兼上房支度第一春乘房慈悲第一阿證
房とて云ふは女院を清年十五也入内あり十六也后妃の位小備は廿二也
皇子誕生は三月東宮小立ありて位小即せりひ二十五年也院號ありた
入道大相國の御女なりて天下國母とておりませり世の人重く仰ぎなる年理も過
たり今年二十九也せ給ふに松葉の糍ひ濃ふ芙蓉の形表ありて高倉
院とて後とせりひ先帝も海小入ありて清教とておはれ晴る清事かたれを
精翠の簪今い付てと何とせんと思召御樣をたえさせりて吉田も都迎へし

物よりして大原の奥小寂光院とて所へりて此竹庵を後院あり古小
石の色落る水乃音縁羅窓閉紅糸道を埋むらり空陰と小夜時雨
軒端の音は木葉乱れ死ん鹿の音幽小陣ありて傳ふ鐘乃音風小清乃
香の煙扉をとりて月のけ窓ありて螢火を共小無常城示りて偏小
朝露の快樂に羈れ暮日れ終焉を知りて思召て佛前小向ひ坐離生死頓
證菩提と証おはし我ありたるも先帝の清面影を友とて心傳ふもあて
清身小亦んし清公迷ひて消へりて女房達抱たりて良程處くはあり
世に出れりて左右小いけと今抱たりたる今小其古蹟大原の寂光院とて
世に名高れ名所あり

土佐房堀川夜討

伊豫守義經と右大将頼朝卿と不和のうらみのこぼれ私語ありて兄弟あり
小父子は契ありて特小其親とて源と去年正月小本曾義仲を追討せり
命成重小身を將へて源平度と比合戦して今年平家悉く亡ひて天下

鎮西海を護人も勲功類ひかく恩賞厚くも皇孫の御子細かくかゝる意
振山来ぬ人と上下あもく怪成るは此幸の去年八月小口宣を豊後國同き九月小口位
たまふはたのち大將小申合せあし何事と頼朝が討ひおぼせあはれき小詔おれ
よ心任せふれまふ事甚狼藉又西海の軍賊まきく後女院の御船小糸おと會東
不思慮又平太納言の娘小相親む事謂かし旁公傳の宣ひく打解まらざと
思ひぬる梶原平三景時後色の船搦えの時逆櫓の口論を深く意根小持く折
得りせしと誑言も平家のみを滅びて天下の君の許公任せ但九郎判官敵斗を
腹公の害と特小心剛りて謀畧勝またり一谷と落さる事鬼神の所為とも覺り
川尻の大風船出り給ふ事之慮乃所りせし見公敵小向て之足も退り
敵小園羽勇韓信が謀あり本朝をいまも聞ぎ怖き人おたりまら一定津款
とも成ぬる由々後大津款と嘆くとして終りらば頼朝をいせし思ひて
退討の心と獲ぬる三浦佐々木千葉畠山等多く聚るる中鎌倉殿後色
九郎が討手の大將小を誰をうさせし思ひしは御前小糸の御影を見く返言はたし
や宣ひられも口成閉て是非の是非申人かし鎌倉殿や相待ぬとも雖有て
打立んと云者なり頼朝を腹しては中に誰々を云人より梶原平三都ふと
て討て来り候へ命に梶原心中に思ひぬる人の上おたりかたなりた身乃
うふのまら今度と景時適まら思ひし御前小糸の御影を見く合せて
よ家の者今度の東を駒の蹄の立人所西を船棹の至んまて攻むべきあれども
判官殿の討手の景時然るは梶原登るは今度の上洛まら御影の御影
小中悪者追討使を所をうして上るやあはれと推量く還て逆寄させれ
討たぬる言候人を損せ候て敵をたすまら謀り候人を他人作られ
て討めし申し辞退て出ぬ秩父河越三浦おと鎌倉の高家みかく思ぬとの
あはれかりられ鎌倉殿良案して土佐房昌俊を召く幸の公成作合は
九郎を討て来れよ大名おと後指上せよ者おと公傳ぬる言也和傳をえ
奈良法師をれ七太寺詣と幸寄せてせよと作候られし言の畏し御前と
まぬ同九月廿九日小土佐房鎌倉を去り十月十日小糸おと六條佐世牛

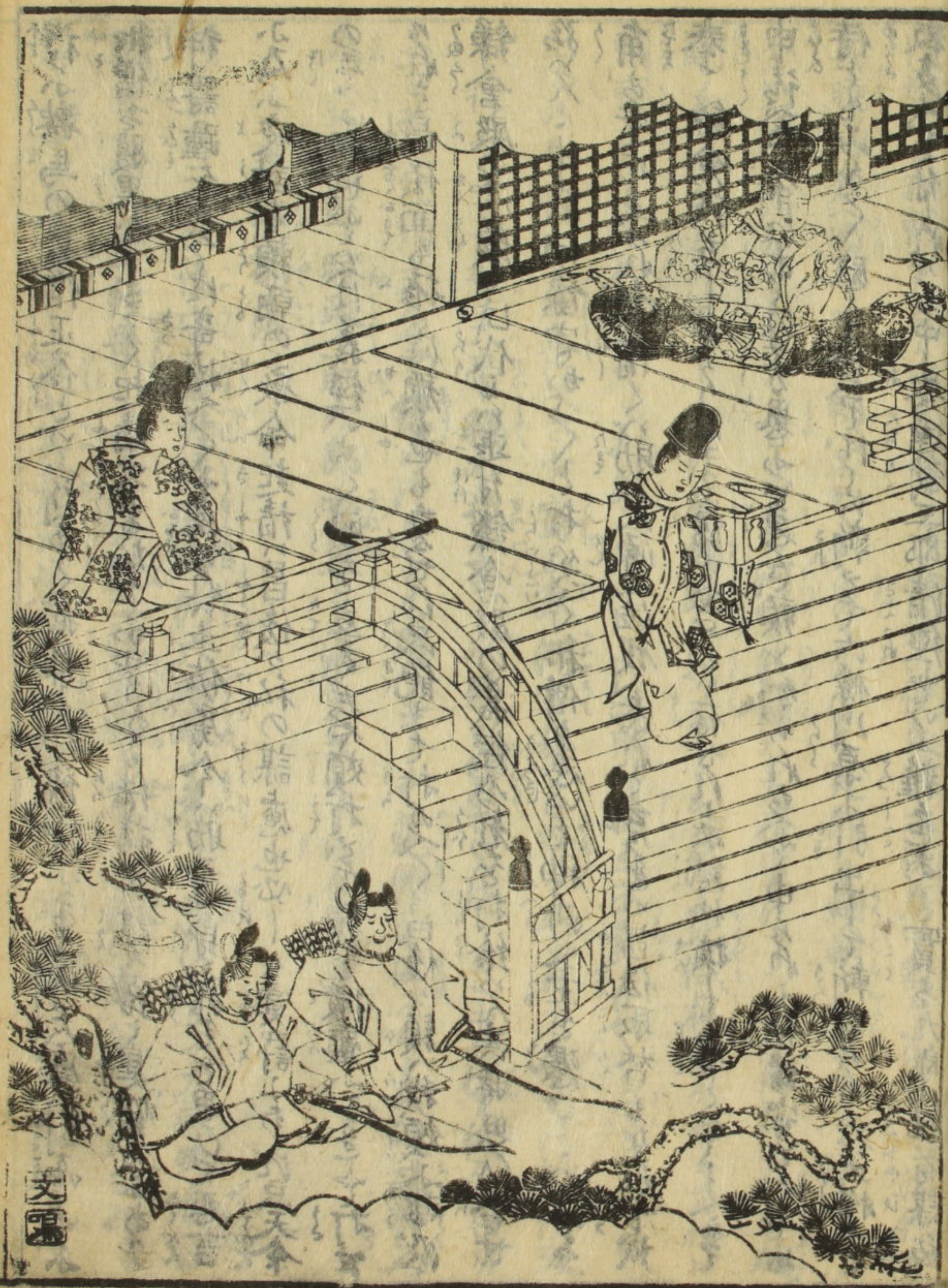


町宿を取らば我々の宿所と中四町を隔たり昌俊上洛と聞かれ頼朝
の書物もかゝ昌俊も来り見入り義経其旨極を悟り同日十月十七日伊豫守
義経大藏卿恭経を召く奏し其の年終綸布拜し勅ふり千里の路を
迷しとる大石小吏く萬死の命故忘れ平氏を討く父の恥を雪ぐ備わ我経
が微功之我君事抽賞せんや我ら小兄頼朝又殊ある恩成加ふべき所小悉く所領を
奪ひ取の久忽不誅戮せしめん欲するの同進退先成先ひ前後度小迷狂官
府を下し賜ふ暫身命全せん欲する若勅許せんを早く自殺せんを申
る詞の中に奥旨あり其の法皇特小驚き思召て諸卿の議論を聞し義経
上洛して北國の凶徒を誅して洛中成安堵ありし西海の逆賊を亡して天下静謐
なり我ら小ば度頼朝と不和成り討手とす登り義経の奏問小奥旨あり
此のいふとるべきと左大臣經宗に申され其の言く云ん其意難を免ん為小
平將といひ義仲といひ申傳ふ小任く宣言あり今度小限り惜まざる益あるを
後小頼朝小謝し作られい何んを腹心を懸えんと討ひ申されり從二位源
朝臣頼朝を追討せよとより一宦府を下り九國四國の勇士義経行家

ら下知小従ふ兼く又四衛庄園成論され調庸小備ふとより一應の下文成
成下られり同日小義経土佐房と口をば成昌俊何復して上洛と成り音信の
なれを也と向ふ着て元昌俊と奈良の者ぞ作ら宿願の事作進とも近年源
平乃合我小打紛く其願を遂げられを果せん為小七大寺詣の志ゆく我ら
依明日罷立俵向取乱し依い奈良より瓦上り心静小淨物被被しや申上り我
經嘲咲く和僧が上洛全七大寺詣ふれと式伊豫守と夜討小成り計眼中に我ら
より大名が成登せば義経用むして天下北煩と成又逃隠る事とるべし
和僧と奈良法師あまの事を七大寺詣と偽り義経を討て及ぶ謀あり
源平名成乱せるが如く軍車蜂の起る如し然れども義経上洛の後兩年の間小
凶徒を亡し四海と安穩ありし其勲功天も上陸あり其れを夜討ししと成り
象不我之無道也即召誠ひきあまも和僧いまだ其色成りたる小義経
より手成ぬるが如く我ら臆病と後の世までも口辨せられん事恥しく且とる

兄頼朝の使あり年芳公の使一召し越する上より半神めと宣ひ土佐房
陳申て云全御敵やむる事更におし御不審に散せんと為し起澄文を書きし
伊豫守聞ひて起澄文を書きし以上は和僧が公任せし宣ひ昌後
其より熊野讃法を尋出して其裏の上天下界の神祇勸請し
をけし書後を戻す燻く吞其存返出き宿所不帰て思ひはれ起澄文書れ
も今夜不意お押寄日夜討せんと其より其より其より其より其より
磯禪師娘お孫といふ白拍子の妻ありあれと討ひ昌後今夜押寄べしとの
討へんおし合くすぬ俣之土佐房と兒王黨六十餘騎十七日お子お伊豫
守義經の六條城川の宿所お押寄て鯨波と夜をたれぬ飯内無くえを時とも
合は静ておつて活れ昌後下りて志お孫お義經の首とれ勇進して馳はる
其時相圖狼煙静前前の奥庭より上れを四万より軍勢満て具持りし攻め
る其中に武藏坊辨度一丈餘の長刀成りたり一方と難まる向者
と拜打侍らるる成車切蜘蛛十文字お切倒も矢庭おれ鯨人死おれ然井

太郎と兒王黨を討殺し火花おとして攻める佐藤忠信を敵の後よりあつ
松明をとり相圖お隠し敵軍大勢の中へも度おあるお孫お義經の馳はる
即ち追詰り大將義經も敵の中へ馳入るあつて討たれ下知
一魚く軍法を示し久忽負鱗の備(鶴翼)おある攻めれ土佐房が
軍敗き河原とて逃走る行家雷より河原表お出く昌後の敗軍お向ひ
汝城お待事久し起澄の天討お見とせ刀を度お抜はき切まると又
おね討たれ叶とて思ひ入川原を北へ落ふる行家お孫を見て起澄
法師遁るお後を莫く追り義經の曉天小院御所(馳奔)お俣を
葵同も甲の上お箭多く折去胡蝶お矢傳ふ二三筋お残るる雄將お夏
るお知事おの知るお是ども其氣色實おゆしおりなれお成もく称嘆せ
お半か土佐房の大原路おつて龍華城を公に北山とて落るる軍兵
二年三手お片お一お切く攻めれ昌後大原より薬王坂を越馬山お迎
義經兒童牛若丸の時當山居住の好おれを駿馬法師と力し七山踏し尋る



義經
法皇御所へ
清勝乞ふ春内
と返く都へ
出云



伊豫守の奥僧正合とつふ所ゆく搦捕く伊豫守なる即大庭小引候といふ
和僧を腹黒かゝりて起清文書なからゆある結構と謀りて其真贋天あり
神罰踵をめぐらけ奇怪しくせゆはれ土佐房今助る身小非ぞと思ひて悪言
小乃夜討と頼朝の敵命起清昌後が私の謀慮也必しも冥罰はれ只天
の冥罰也とせは義経よく腹を立ちて志願打と頼朝を微塵ふまじと打せ
たり昌後面も振に頼朝も変せに只能て打とく昌後頼朝我頼小非
鎌倉殿の御顔は代に返付鎌倉殿の義経の教を打給ひ其時思ひ合せ
強ひて申に伊豫守かくと打笑く和僧志願と神妙之主を憑ひていふを
角まきりて令惜く助り源二位殿へ奉れと云はれ昌後取替もが令
奉て鎌倉立一日より生く居るべきと存せられた未討仕損し虜とありて
申後き令にわはれ芳恩の急を頼朝に知らせ申され伊豫守ととめ
侍どもふかく感へりて斬りて六條川原小引出して斬りて大將を
殺多人を付れり中安達新三郎清経とて雑色あり實を九郎冠者謀叛
城發して頼朝を背く急告とて檢見の使あれ土佐房討ち成見く清経を
其曉鎌倉逃りて頼朝つふゆくせしめり九郎を頼朝の敵とて成ふり
今い悟る所かゝりて舎舟を河守範頼を大將軍のく六萬騎の兵を相
副く上洛も命たり今に範頼既打まらる所北條梶原かやとられ
頼朝を打て和殿も打解きふら九郎が擧ぐりやせ存せしめ
上洛のま暫く左止むべきを宣ふ河守警と勢々不義と存せし起清文
を付るてて梵天帝釋を誓言して新も背を仰ぎき由の筆紙を百日
小百枚の起清文を書懸りけしとも用ひてて範頼を停たり義経謀叛乃
為北條四郎時政土肥次郎實平上洛せしめり後命せられ

義経都落

同十月二日伊豫守義経は皇御所六條殿小春て思ひやう大藏卿泰経
朝臣に向ひ義経畏く申すに源二位頼朝の忠勤の奉公成され由り
悪く思ふ事深し更其意欲其誤かきり聞直り思ふ所いよく



諸君は侍を今思ひ切く京都ゆくいと成る存一燈も君の清きも
母の爲ふと頼むる一より西國方へ下る豊後國の住人惟任惟義等が伴へ
始終見放さる合カとて此院の廳の御下文を賜ふ夜寐を休むる度々の軍功
事思ふ言ふたのふたから最後の所を只一事に侍して推詢申されい泰經即
奏聞とて法皇御召進退思召頼ひく大臣小侍ら其時左右の大臣議とて洛中
はく合衆及び朝家の濟大事を傳へ軍將を外土へ出さる幸稔ある事や
奏しこれ申傳ふ小侍の廳の御下文を賜ふる義經を奉て宮中成す
出ぬ北の方平大納言時忠の娘日頃志深く通ひはとて頼朝と不和なる
後い女房も打解に平家とて一時忠を虜せしに鹽の箱を乞得ん爲ふ
意の次第を絶しとて女房も義經をたれ故思ふ密小けて幸す
様を窺ふと思ひ、此の宿所の垣根小舟聞かれ側的女房小物語をこそ伊藤守
殿を強奪取ら中夜く成て都を出ぬと聞世成はしとて此事も傳ふ一夜
の契跡あるに遺後つる月日あるを思ひてつるなと青信するくすくす

人の心の強面つりたるやとて

心打解してさやくや泣かたり義經を必むかつらあかるとなりと哀ふさひられ
も今宵もあふ泊りて行末城方の物語互小袖成て紋も北の方を六母あを
死に別れ父あひすり別れぬ便もあは身の人を哀れ思ふは死後へく
前世の契も遠くぬいある有様もあはる相具しぬと歎き伊藤守に言ふ
子なきあは侍共義經を源二位と不和ある人日本國小舟を歌あはる
願ひ今い身一つ玉新たまはれ何方も思ふな心小仕せぬ身の憂きこと
夜々小舟の腹の空出ると止傳もはらあは傳波惜りやを思ひとて哀れあは
去後小舟三日卯時小義經院御所小奉りて頼朝軍兵を指さす退討の
企て發せ速ふ時政實平城侍受く雌雄を決すしやいとも都の煙へ人あは
中舟にのりて只今洛中成罷退所今一度龍額を拜し奉るやとて
とを其體出陣の務め思れあはる今存人君を勅渡を肯らとてさうら

小申上りたれどもあれを耳人みみびとの威嚇おどろかしめ或の備ついでをけり即出たれどもおとこの患わざひ
あはれ其出たれ赤地の錦の直垂小崩黄威の鎧を着て赤慎あかしん三百騎ひゃくごじゅうさんひゃく相具あひあひ
都を立安みやま九義経京都守藤の國威有あつく極たけめは忠育ちゆういくく私ひそか深く武勇ぶゆう
と厲こぞく敵慮てきりょ成背なりそむの過人あまのこを小相叶おあひあひひたれは老若貴賤らうじやくきせん措あきらめ合あはれぬ者
いかりの多おほく今知いましる奏聞そうもん壯士の法を乱みだるるを生なじて嘆なげめ死してを思おもはれり
後世ごせいに至いたりて此人を惜思うらみふ事ことの童子こどもすまると云いれりて其その神かみを義経よしかげ夏なつ夏なつ夏なつ
やののうへ八幡の伏拜ふしはいしつ小所こところを義経馬よしかげうまより下甲しもがら成なり敗なりさうと腰こし小探こたん跳はさ
申まをす正八幡宮せいはちまんみやの源氏げんじの姓神せいじんとあせ高祖たかそ頼義よりよし夢ゆめに告つげ成なり勢せいあり男子なんし
誕たびあはれを八幡太郎はちまんたろうと号なづけ一天いつてんの護まもりて四海しがいを鎮しづむ近年こねん平氏へいじ逆乱ぎゃくらん盛さかなり
間源氏まげんじ威いを安やすま事こと平北へいきた一年いちねん之今のいま又平家へいけの宿運しゆくうん盡つく源家げんけ世よを取とり義経よしかげ四國しこく
九州くしゅう小渡こわたりて平氏へいじを誅戮しゅうりやくし畢はぬ其謀そのまうをかく犯とがを事ことにさしめし舎兄しやけい
頼朝よりとも諱なづけしとく義経よしかげ都みやこを退ひく譬たとへ洋やうの水みづを離はなれ飛鳥ひとりのの翼よくをたか如ごとく
頼朝よりともを懐なつく人ひと廿ふた代じ知しる人ひとと思おもふ事こと神かみ直ちよく測そくかじせ堂どうと合あはれおとておま
るるかく攝津せつ國くに大物浦おほものうらより船ふね小宗こむねく九州くしゅう小所こところ尾形おしがた三郎さんらう惟義よしかげを悪あく人ひとと
あか止とどめんと物ものもあはれ叶とは鬼界おにがい高麗こうらい新羅しんら百濟ひやくせいをも居ゐり人ひとと思おもひ出帆しゅつぱん
一いける小折こせつ節ふし十一月じゅういちがつの事ことなる人ひと逆風ぎやくふう頻しばしば吹ふく寒氣かんき烈れつしく大津おほつ荒あく寒か
平家へいけの怨靈うんりやうあやあはれ海上うみうへ所ところ々々々端はな上うへと奇怪きがい多おほなりりるを皆みなく風待かぜまちしく
又また船ふねを出いすべしれどもとて波風なかぜ甚おほく船ふね覆ひたり人ひとを今いまいれぬを出次しゅつじふ便べん
おとやあめりて所ところ小都こみやこへ北条きたじょう時政ときまさ土肥とへ實平じつへい登のぼりて聞きえられ津つの團だん費ひ
護ごの軍ぐん率すう鎌倉かまくらの用もちえと輝あり王わう進しん駆かく馳はりて過ありてききりたりて三百騎さんひゃくきの軍ぐん
思おもひく小落こらくなりり義経よしかげの白拍子しろはくし静しずを召よ具ぐ大和やまとへあはれり宇多うた郡ぐんり
一い宿しゆくり二月にがつ十四じゅうし日にち小春こはるを花はなの名所ななところを名なも高たかなりり北山きたやまを入いりり

吉野静

太宰權帥たさいごんすい經房けいぼう卿きやう詔みことを奉たてまつりて北條きたじょう土肥とへ小作せうさく者ものあは源義経げんよしかげ殺逆ころし方かた企おこ有あり西
海うみ小落こらくなり大物浦おほものうら小落こらくなり急逆風きやくぎやくふう小逢こあ漂ひ波なみの由よし風聞かぜきこありと事ことも今いま成なり亡なし
の泉いづみ疑うたがひあはれ小あはれ早く武勇ぶゆうの事こと小傳せつせり山林さんりん河澤かさわの間まを尋たずね

不日小弓捕へてを院宣成り下されたる昨日義経懸望ふり頼朝成追
討まうし院宣を下され今日又頼朝の威勢小恐れ義経を搦取ら由
院宣を下する朝の議定夕小散散も誰人論言成信せん何事の事勅令成
重んぜられ後白河法皇の歡慮より出る所ありて後世に至るまは王道の表の
武門の繁榮やある事ありか知れぬれ其頃雲客成頼の文を好く其
性廉直親龍の文書と傳く公事小熟にあり世を遁れ雲水の境に
入らん大原北幽棲小隠れ降季の素養の家小生れ頼朝の文臣入肌より
早く成り長方つち大才ありて双びり文章と曉して詔上古れ名臣賢
友を素意小寄せく鬢髪を剃落れ君子れ道清く小人排ひ進む最喜れ
あり世の分際都の春西の似もはくより時いままを幾る年の言かれ谷
川の岩根も水柱も一ひありぬ山奥小判官成大和の宇多よりあり小喜び
あぬる宿願を於兼く静を是す供せられり武蔵坊諫く云ぬ後人の身
具せぬ幸云甲斐なくして七條とさるぐ申上られ判官成許容り多ひ

舞小侍武人をはめて都下海へいひる此侍も判官のふひは財寶を
分く出奔りたれを静い山路小捨れ雪より道あれを海へはくふをわい又
谷小下して悲しむ声の聞えたり小耳をそを交くゆめは幽小聞ゆおそい雲
の下り細谷川のぬれまは小ほくははまりなれめ目の苦さを獨りかき遣ひ
心の中を悲しめられ雪を分る道を見り判官の道所ありけり今我を
於者共のい色も有らん足をそを免く竹徑小漸大道あり出ふり道
かる深き谷小こそ一火のあふんえられいある里もあるん賣炭の翁も通
され炭竈は火やもたしあり道はきり見れ藏王権現の御前の燈籠の火
を燈有る静嬉しと限あり正面小向ひ拜座のこ頼く権現の利生
はくは度安穩母都小返り又あり別ま判官成を今一度念をのんや
初よりかき所小若大衆大勢に立出りわうはく一の女姿や只今も昔人
いふおふくおはらんあられ権現の御茶を何事母くも浄法樂侍あり
中よりれ静あねをゆりみはく一の近きわりの者あり毎月茶花り



新古今
うのきき
かろもり
何ま
あか
山
ま

五

文



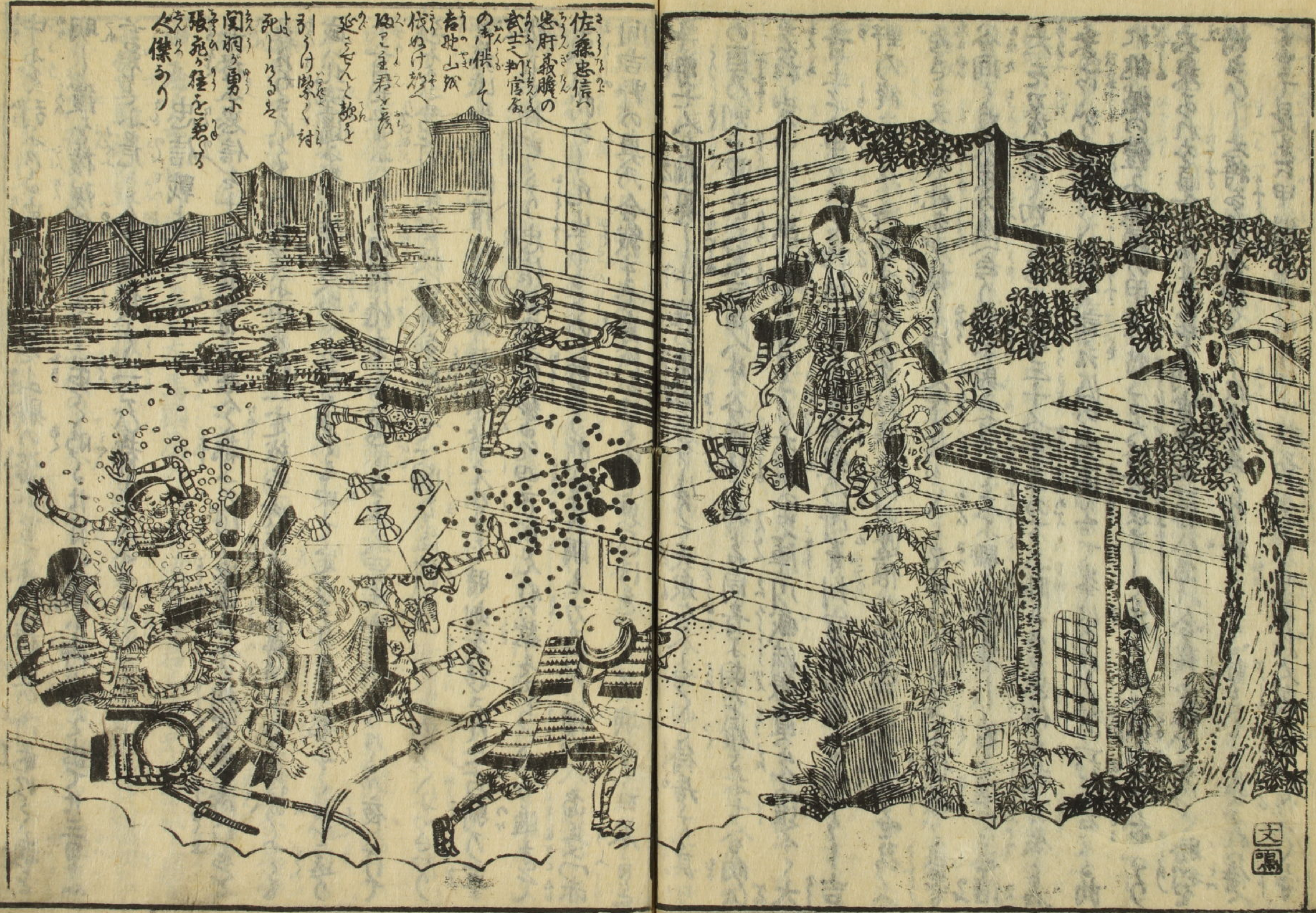
吉野

黒小深あつ甲曹とて彼の弓箭取く幾場小越人半程便あつて謀先
たれ若大衆をねらふ事あれども治家の合戦小南都の两大寺高倉宮
小よぬれ大政入道怒り伽藍を亡しなる例も有り申す申す老僧
達も以上とこそつてもせられ其日成まらき一ぬれ廿日の曉大衆勢掃
乃大陣を掃掃する判官殿を中院谷小ありぬれ雪群山小滝は谷玄
小川も密なる駒の蹄も通つて踏むも付き兵隊も持たぬ人疲れそ
もあつて陣あつていまも場の中あつて道の林に鐘の声聞えたる判官あつて
思召く侍共を召て仰れぬる晨鐘は音も又鐘の鳴まぬ不審な院
宣ひぬるもあつて南東へ忠節として我小敵をせり其責成成
直垂小黒糸絨の鎧着て法師あつても常小願を刺す三寸をり生るも
鳥帽子着く四尺二寸の黒漆の太刀城杖小は熊の皮はぬれぬる深く
踊りたる雪成嵐の落る花の如くけりしてどどどり跡勤堂の東大日堂の上を
見渡せば寺中騒動して大衆南北大門小詮義して上を下をせり乃武藏
房常陸房等ゆも申す思ひたてて中院谷小あつて敵を掃く大願小成て
惟之申す判官殿あつて東國の武士吉野法師を仰れけり
みかく禁の者ゆく侍とて言ふ相も叶ふはぬ所案内を細く悪所小退
かちつて叶ふは武藏房申すも愚僧を掃本房小暫く右住一案
内を知りて三方小難所ゆく一方小敵の夫先ぬ深き谷ゆく鳥の音も幽あり
北の龍庭しゆく落る所を山河の隈に流るる東の大和乃宇多小憤恨
あつて落るせぬやと申すあつて十六人の良徒思ひく小落小なる
く小音も聞えたる剛の者有り祖先成原ぬる小謙足大臣の末淡海公の後胤
佐藤則隆が孫思の庄佐藤庄司が二男藤原忠信也つ侍有人とて多小清
中進之出雲の上申して申す君の所存極成警まはる所羊れぬ早く
清心を安し落るせぬ一忠信いぬる所林に大衆成待受て一方
の防矢仕一ま落る申すと申す判官殿あつて守をむむじぬる

清盛の兄次信八高合我小義徑が爲小令と持能登殿の矢たふりて亡ひかゝるも
いまだ清盛付添あまの次信も兄弟あまのいまだあまのたのぞくもひつぎ
もてや年の内をくくも侍らぬ年睦月廿未由陸奥へりんぬれ清盛も
下てて秀衡も身よかゝ又思ふの里もさゆ華一妻子も今一度見あらし
中作はれの活業のけり免陸奥を打立一時もたふりて君小令成事りて名を
後學小よ矢あまの侍り死なすや中守の若貴由秀衡が忠成はせし高志成り
小及び効功の君の清針の申合られ一令生く故に帰れと申すは業のけり
思ふよるめ一母も人いも其時と最後とあり申切く惟く弓業取身のけりいふ
おの上あまの我身けりふふかゝるは他又君良清公弱く渡らる侍りて人よた
振小申す存後とやまは武藏房あれをばて弓矢あまの若の伺と論言小侍
去系に中一はふま成飄まの武士の孝いあり心安く清賜を賜り惟く我りる
判官あまの物も侍れぬ有く惜じも叶はばさういふは甘ふせよと作を
なれも忠信あまのいと娘一々小思も人よりぬ山奥あまを侍りたるそれより
平辨七人を相具一中院の東谷ふと侍りて大衆を令やくと待居り其日
の酉の刻を切りに大衆三百人斗谷成備て押も同音小関を作るふ七も向ひ
かむ中より出小関を合せり大衆の先陣川藏法眼真先小進令く大
音上て申すは柝は山より鎌倉殿の清弟判官殿の侍りてあまの吉
野の修行は清迎小泰とせ我共を竹の邊恨も侍りて一先落をせ給ふ
なまの又討死かや娘一作又やと侍りて一々申けるあまの佐藤が良等
谷間より大衆の後より頻小射まらぬと大小騒々周章一弟小進め忠信
大を刀拔ぬて切はる忽二十人車双の下小阶あまの忠信と判官殿と君
衆あまのこれに敵を討たぬ山へ飛上りて峯にのぼり松のむら有り
に桃織の鎧小龍頭の甲被着る大將惣然りて座し松小形を拵へる
大衆あれを見くはとあまを判官殿上二谷八高合我小議とりて勝利を
得まひ一大将あれをぬくよは遠矢小射りたる動も一松の侍り
らまて見まひ甲獲をりぬく中に松葉もそ有あまの大衆も大衆あまの寺

清盛の兄次信八高合我小義徑が爲小令と持能登殿の矢たふりて亡ひかゝるも
いまだ清盛付添あまの次信も兄弟あまのいまだあまのたのぞくもひつぎ
もてや年の内をくくも侍らぬ年睦月廿未由陸奥へりんぬれ清盛も
下てて秀衡も身よかゝ又思ふの里もさゆ華一妻子も今一度見あらし
中作はれの活業のけり免陸奥を打立一時もたふりて君小令成事りて名を
後學小よ矢あまの侍り死なすや中守の若貴由秀衡が忠成はせし高志成り
小及び効功の君の清針の申合られ一令生く故に帰れと申すは業のけり
思ふよるめ一母も人いも其時と最後とあり申切く惟く弓業取身のけりいふ
おの上あまの我身けりふふかゝるは他又君良清公弱く渡らる侍りて人よた
振小申す存後とやまは武藏房あれをばて弓矢あまの若の伺と論言小侍
去系に中一はふま成飄まの武士の孝いあり心安く清賜を賜り惟く我りる
判官あまの物も侍れぬ有く惜じも叶はばさういふは甘ふせよと作を
なれも忠信あまのいと娘一々小思も人よりぬ山奥あまを侍りたるそれより
平辨七人を相具一中院の東谷ふと侍りて大衆を令やくと待居り其日
の酉の刻を切りに大衆三百人斗谷成備て押も同音小関を作るふ七も向ひ
かむ中より出小関を合せり大衆の先陣川藏法眼真先小進令く大
音上て申すは柝は山より鎌倉殿の清弟判官殿の侍りてあまの吉
野の修行は清迎小泰とせ我共を竹の邊恨も侍りて一先落をせ給ふ
なまの又討死かや娘一作又やと侍りて一々申けるあまの佐藤が良等
谷間より大衆の後より頻小射まらぬと大小騒々周章一弟小進め忠信
大を刀拔ぬて切はる忽二十人車双の下小阶あまの忠信と判官殿と君
衆あまのこれに敵を討たぬ山へ飛上りて峯にのぼり松のむら有り
に桃織の鎧小龍頭の甲被着る大將惣然りて座し松小形を拵へる
大衆あれを見くはとあまを判官殿上二谷八高合我小議とりて勝利を
得まひ一大将あれをぬくよは遠矢小射りたる動も一松の侍り
らまて見まひ甲獲をりぬく中に松葉もそ有あまの大衆も大衆あまの寺

佐藤忠信の
 忠肝義膽の
 武士判官殿
 の御供と
 倉地山然
 成ぬけ勢
 御主人君を
 延入と勢を
 引く付勢と
 死しるるを
 関羽の勇小
 張飛の怪を
 大傑あり



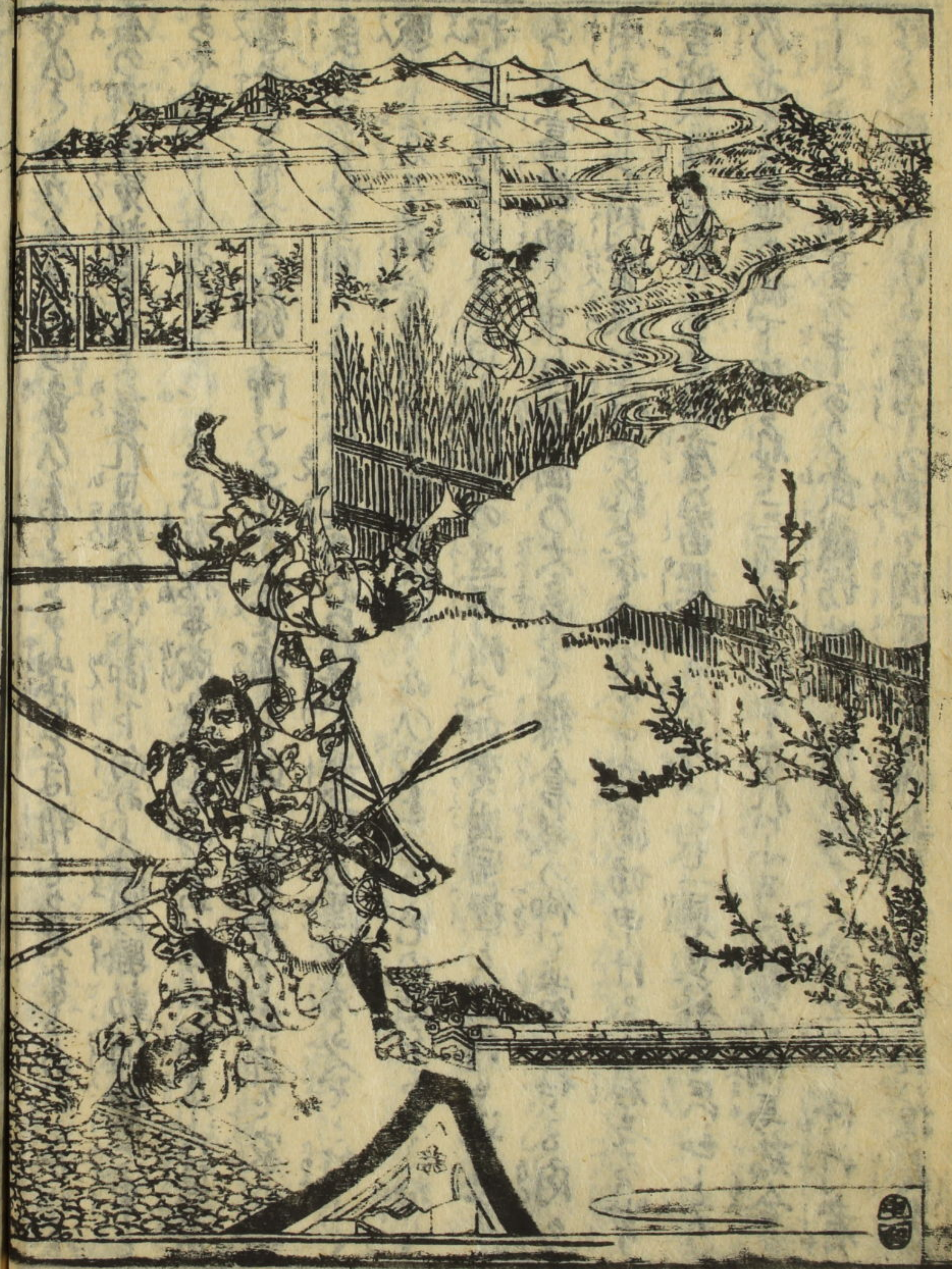
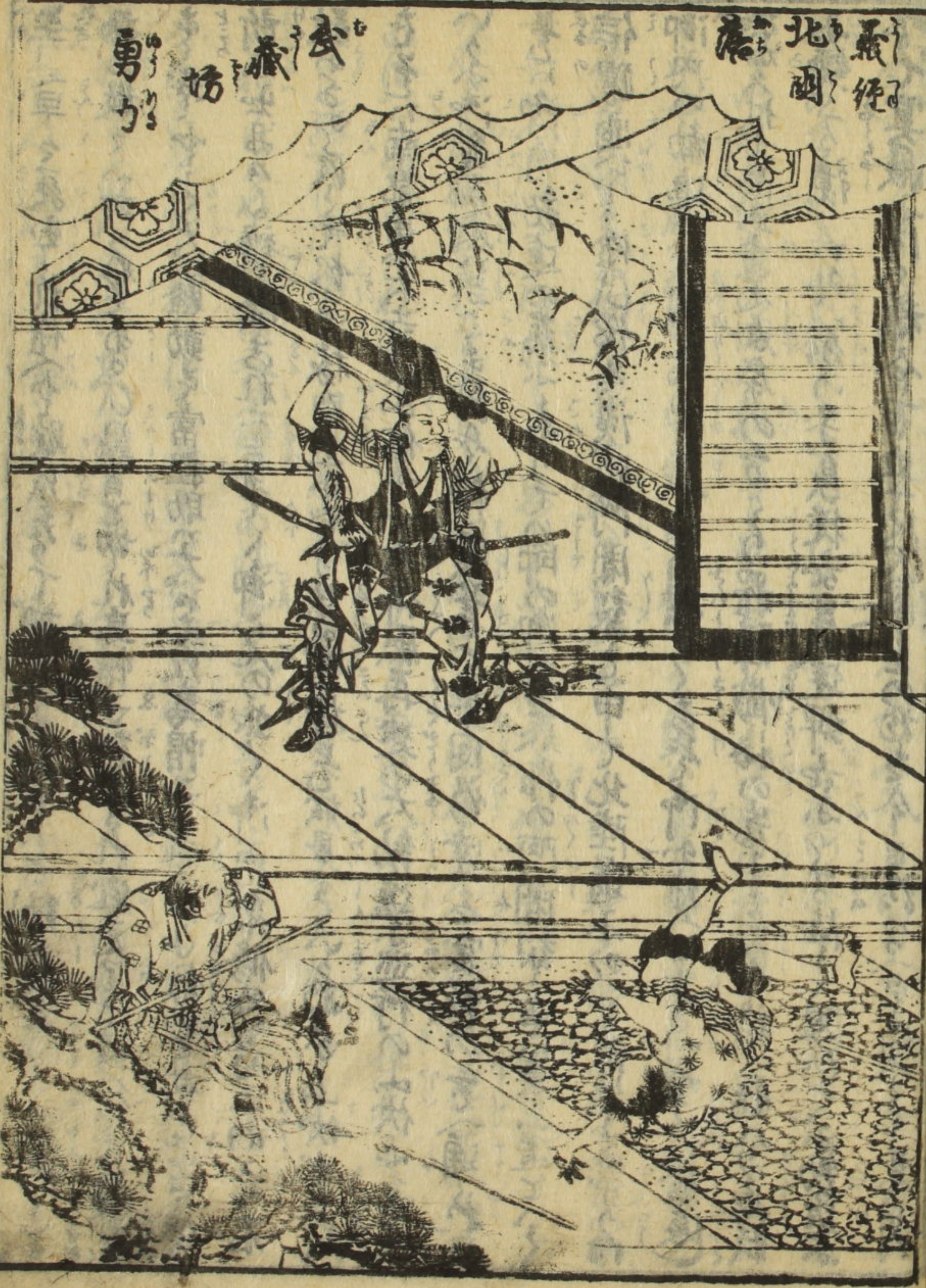
中より引よる忠信其夜を山賊の夜小督て蔵王権現の沖にゆくを
明一獲を権現の前より一處くめり廿日の曙小御藏を出て廿三日
言ふと小危さ今も存へて二つび都をへ入る。

忠信戦死

去程小忠信を十二月廿三日小忠信を都の傍り活中に今判官殿の海に
尋ねられども人まわく小申され一定城をけりひい吉野川小身と投め
或は北陸道小の陸奥へ下りひい申ても申て定めりられ都をく日を送り
十二月廿五日小忠信他事あく思ふ女も人四條室前ふわり夜を
そそふ君行々衆女悦ひ斜めけりて一間有る所小忠信を
られは半六波羅北條四郎時政小忠信を時刻を移され二百騎の軍
勢よく押寄り忠信歎の声小忠信の四方板刃の故をみるより遁ま
出る所あり凡生あるもの終あり所詮其期を力及りて潰れ高長門赤
同吉野の奥乃合戦まで身取られたるを思ひはきき其期なぬ今日

生延ぬれ中も只今最後ゆく有るを誓ふも長なれいま改出するや
白小袖小黄も大に直垂の袖沢結ひて肩小打ふきおきみられ髪を取
上り烏帽子着て六条堀川の館を原後白河法皇の清所へ君判官殿
一昨年も伯のひ一名残あれい君を見よれあと思ひてとこやくも
おくもやさひかの北条が死をいと自在お切ぬけ堀川の館より同
遠より北條の二百餘騎押寄せ先陣を大庭小込へ後陣は門外ひい
つり江間小四郎義時親が王と小楠小忠信と申るは忠信也
通系は下れ大將軍北條殿の御間の小四郎をもく出ぬといひ忠信
標の上よまふふふ都がさしほさ落し子矢をわく申るは江間小四郎
申る幸有り鎌倉殿も龍馬頭殿の清君達葉が君も清又中將か始
小伊豆駿河の軍兵殊外の狼藉小見え作之弟幸鎮めく剛の者九腹切
やうな清流せよとされあせ未代の子中よ鎌倉殿も自書は標をも最後
言葉をも傳へてと申されいを心静小腹を切せぬと手徳と打

申されぬ大衆判官なるいあはるるや納得し伊勢三郎を使者長史
小膳をたれらる公あはれ大衆陸路少く二三町を送り思へく思ひまじし
平泉寺とも鑿の口を通れる心地して足早ふれ通れらるかくて養生の
宮儀拜し金津ふ着のふ向より唐櫃あまのめせて牽馬其数未りて由
りある大名ふ途よりなるされさへある人ぞと向ひられたかかえ國井上左衛門
尉と申人城前のもち山内國行を申け判官あれを問ひて其れ
通人ともあれものれぬさ道か一今いれそと宣ひく刀の柄ふ成打
かふるあく顔を原して通人として給ふ折節風烈く吹雪を吹下す
なれを井上左衛門一同足あせく馬より飛令下を大途ふ獲をばさ
暮して申されぬもの事さ其れは途にゆく途のあはれ事不意ふな
わく我ら井上と申もの少く程遠き所也まねくとも申ふ山伏の式
着の思れ少く倦疾々と申し我身馬中を騎ひ遠く送りまを御後らる
えぬ程もあれ各馬中を騎りける井上の道を隔て家れ子良徒を
呼ひて申らるるひりきひもも山伏をば非と見えあるあれは持鎌
屋の御舎判官屋より喜れ日頃の様御下向あつ國の騒動道路の大事と
まは成る一あれをばは有松中成ぬる事いとおはよ討ちぬ莫きの
恩賞も有べきの給ふ清りりり身通し通しなるをばと云はれ家の子
良等あれを問く井上の公をのあれ情も慈愍も深かりる公と仰く
感へ言らる判官其日を篠原に泊りぬのめまの安宅の源をえぬ恨
ね小着給ふあれを白山権現の遠拜所にかかえ國富樫といふ所も迎へる
あは富樫助と申ら富國乃大名中鎌倉殿の御し蒙るねる内々
用意して判官殿を待たれを問えらる武藏坊申けふの君をあれ
宮城へ渡せちりも難慶の富樫城の分野をも一見せぬと只むりり
乃あ富樫の城下城を三月三日此半なれ小弓の楯ひ騎馬給合を
して其酒宴の中あり武藏坊城門の内へ入て大声をよす修行者
はく修し申ける家中の面々同耳立ち酒宴も不興なれ恨難ら



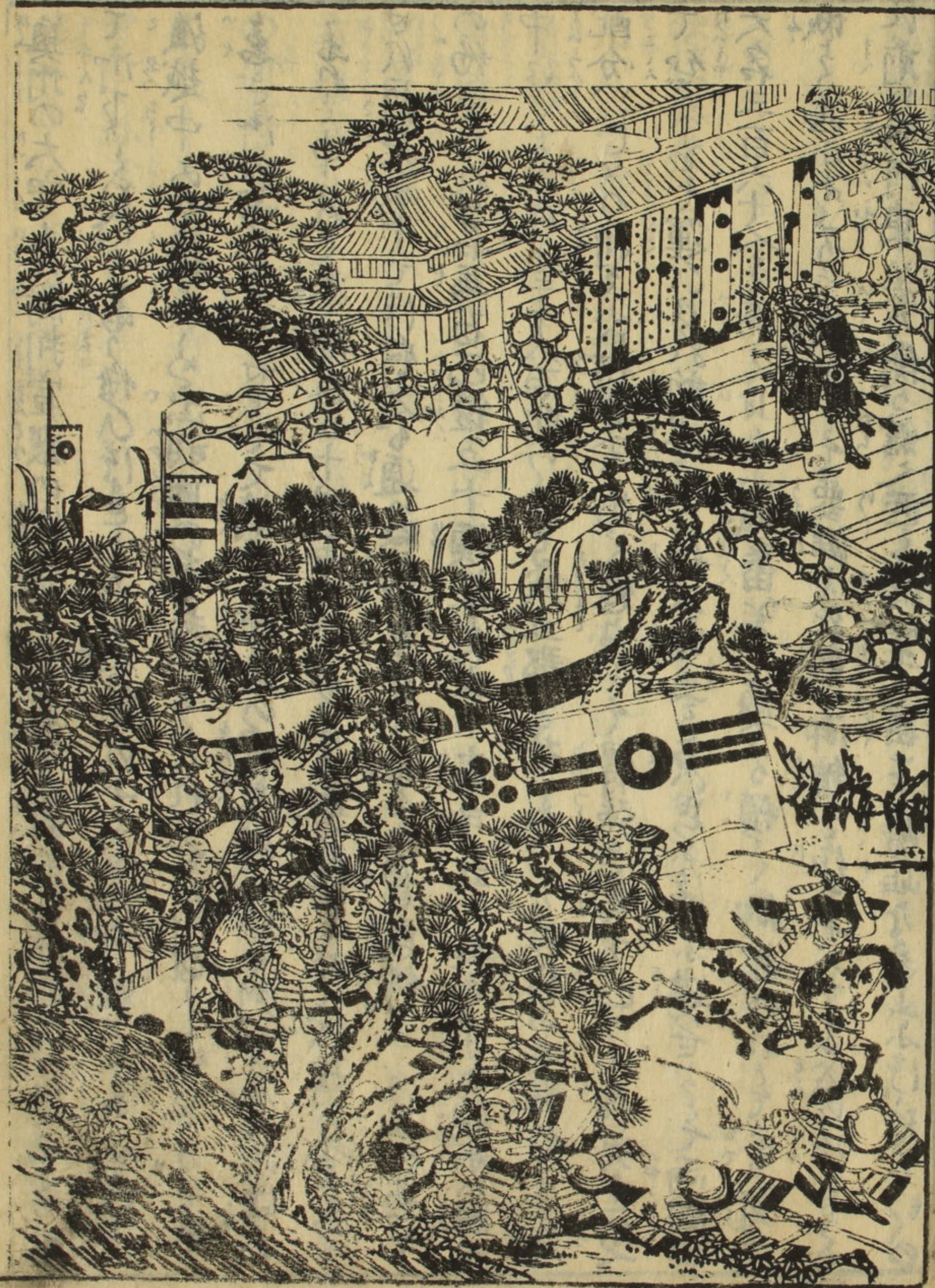
至り早々疾ゆれ侍也、腕迄なきて押せりもかゝりしと勅り候へり、
振り散り小打々候もあつひの鬢と切れ烏帽子被落れ、
走りては修行の法被を着、
さきぎやくく大騒動も富樫助の天に、
烏帽子を着くも、
所小出ぬるの辨、
慶あれを身く、
御之の如く、
津内衆修験者、
不
敬おるの成り、
縁乃よふ登り、
富樫は城見、
いふお山伏、
を乞ひ南都東大寺、
山伏、
大佛殿再建の、
大勅進、
巡行の、
山伏、
いふ津内衆、
いふお山伏、
早回、
建を、
宮城の方へ、
通れ、
是ハ津内勅進の、
為小あり、
て、
師の、
御房、
兼作の、
阿闍梨と申、
東山道と、
信濃、
酒へ、
焼ひ、
僧を、
漢法、
阿闍梨と申、
て、
北陸道、
小の、
こ、
旅、
ふ、
つ、
御内、
の、
勅進、
い、
小、
や、
申、
け、
は、
富樫、
よ、
く、
あ、
は、
津、
出、
候、
と、
し、
掌、
の、
資、
慶、
加、
か、
上、
品、
又、
十、
疋、
女、
房、
の、
方、
と、
り、
罪、
障、
懺、
悔、
の、
為、
小、
と、
て、
白、
袴、
一、
疋、
ハ、
ツ、
花、
枝、
小、
鑲、
る、
積、
、
外、
家、
の、
子、
良、
從、
女、
房、
達、
婢、
女、
小、
つ、
る、
は、
思、
ひ、
く、
小、
勅、
進、
不、
下、
と、
眞、
帳、
は、
は、
く、
都、
合、
百、
五、
十、
人、
の、
數、
を、
の、
物、
を、
今、
日、
結、
つ、
る、
を、
候、
も、
是、
月、

中、
旬、
小、
よ、
り、
候、
も、
れ、
を、
其、
時、
恰、
も、
候、
り、
と、
そ、
み、
あ、
く、
候、
も、
玉、
て、
候、
物、
小、
あ、
れ、
馬、
小、
の、
せ、
り、
候、
く、
宮、
城、
ま、
で、
と、
ら、
れ、
た、
と、
ま、
よ、
り、
大、
社、
の、
邊、
に、
候、
き、
判、
官、
番、
小、
會、
ひ、
たり、
ゆ、
れ、
と、
妙、
意、
の、
城、
乃、
取、
り、
下、
に、
り、
る、
り、
守、
城、
平、
権、
頭、
と、
を、
い、
ひ、
ら、
る、
所、
出、
て、
申、
中、
い、
あ、
れ、
を、
城、
中、
の、
守、
權、
邊、
に、
所、
を、
候、
い、
兼、
て、
作、
と、
並、
家、
を、
信、
山、
伏、
通、
り、
れ、
候、
り、
領、
ま、
る、
細、
城、
申、
せ、
候、
と、
い、
群、
幸、
ゆ、
く、
あ、
る、
持、
と、
候、
付、
れ、
候、
候、
所、
不、
十、
七、
八、
人、
津、
内、
の、
権、
頭、
一、
々、
思、
ひ、
あ、
は、
せ、
候、
守、
權、
へ、
そ、
の、
や、
と、
違、
せ、
ん、
と、
い、
ひ、
られ、
と、
武、
藏、
坊、
声、
を、
あ、
り、
け、
羽、
黒、
山、
の、
濱、
波、
房、
と、
北、
陸、
道、
に、
て、
見、
ゆ、
れ、
候、
や、
あ、
は、
ら、
せ、
申、
ら、
れ、
候、
実、
見、
未、
せ、
る、
中、
小、
あ、
は、
せ、
一、
疋、
年、
も、
御、
性、
本、
と、
津、
内、
城、
下、
に、
結、
り、
津、
坊、
や、
と、
申、
け、
は、
い、
希、
慶、
姫、
一、
々、
小、
よ、
り、
も、
見、
れ、
り、
と、
か、
一、
顔、
色、
和、
げ、
ら、
れ、
候、
権、
頭、
又、
見、
望、
て、
あ、
れ、
先、
入、
と、
い、
ひ、
と、
い、
ひ、
千、
色、
れ、
ま、
り、
夜、
め、
し、
本、
所、
あ、
は、
せ、
候、
思、
ひ、
は、
ま、
を、
申、
せ、
は、
辨、
慶、
あ、
ま、
加、
賀、
の、
白、
山、
よ、
り、
は、
ま、
こ、
り、
津、
坊、
あ、
り、
あ、
の、
津、
坊、
也、
小、
新、
々、
あ、
り、
人、
々、
小、
あ、
や、
め、
れ、
道、
乃、
妨、
あ、
ら、
あ、
る、
あ、
は、
せ、
詮、
な、
れ、
と、
腹、
ま、
る、
俵、
ま、
る、
ま、
る、
と、
い、
ひ、
候、
と、
あ、
は、
ら、
せ、
津、
内、
腕、
を、
搦、
ん、
と、

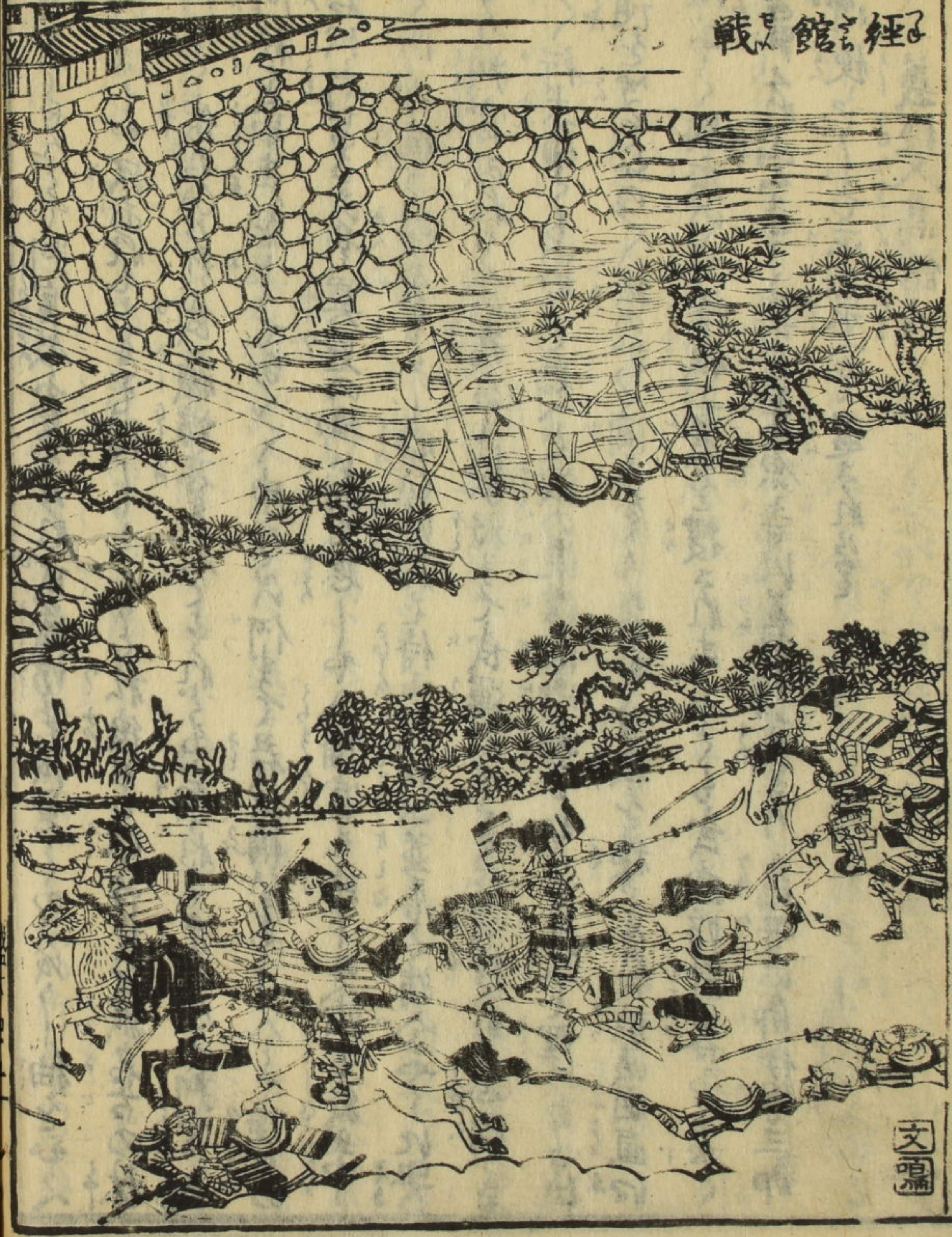
肩ふりけ濱ふまよりゆのふがけと授けし賜の願ふていりげもあ
續け打ふまぐふ打つるなる人目もあてれき涙を流くいふ居る
権頼も我を見く都て羽黒の山伏はと情あきそのもあふるるもこれ程
痛く打つるいあて判官をわくい曾くたし詮むる所是の某打
系せざる杖まであせお色のを清りりりし事あせまめとされふり
ぬとてぬをけしし子も権五のせをうて云らるるもぬをけしし越あゆ
えい何のなひふ羽黒の山伏船賃あしたふせと云はれて日頃取らるる
あなれも清坊のあゆり放逸ふあふまふとてぬを流すは辨慶和殿のやうに
いさふ當ふ出羽國を二年に内ふあぬ事いよあじ坂田の渡りけ
かんの父坂田次郎殿の領之只今は毎當て返ふ人ぞる物とせあふりはれ権頼
何とも宣へ船賃とていえぬは涙を流すはしつと辨慶されふとれる例をたせ
やもはふふく辟事とていふにふくぬはくそとていふにせしむとてあのが能
中鈴りけとていふにせしむは権頼法也何せて取てい候ともあの清房のい候

義經入高館城

それをあふ日んとて判官殿おまうられ武藏坊は御見せくぬけし袖をむく
てあふぬしや只あれもあせも同しまふとれ倍なる六ふじと城名古の林
をけしとあふひり武藏坊あせんとされどもあせぬ走らるる判官殿
の御袂を取声を上げてあふく申すい何まで君候構ひあふ日んとて現生の
主君候打するあせ冥見の御罰も思しや八幡宮も許しは流るあせ中
とていふも極き辨慶もふし時ひ泣かれ侍士も一所ふあせ居る消令やうに哭
あふり判官あれも人の為あふか程まで武運のほくもは義經ふか志流る
ぬく行末あふもいぬと思へは涙の流津津袖をむくしぬを理りなるは
清河を穿てあふく袂のかく同もあふり日教を候るはれ我後國直に
の津ふく國府の守護職ふあせを授けられあふくも武藏坊計畧とて安く
打つ野々れ山とていふ其日栗原寺に着給ふまより龜井六郎伊勢三郎
とて平使とて平泉へ遣されらる



新義高台
經言館戰



文囑

奥州の大守秀衡判官殿の御使と定意を對面せば何と北陸通小かぞ
て清下り内々義の傳ははきとも一定仕候ふと云く御迎をも奉せられ
後越中お我恨あつて出羽國の者共ふと云られさおり合し傳ははきり
多き清途ふ人を奉せよとて嫡子基義の冠者故よびく判官殿の清途ふ
まれと申されし泰衡百五十騎中を奉りたる秀衡さし形我館へ合き奉り
廿月見展やしてはねふも通らぬ所なきなり日々小食度料おれは成意て
の物束なれは名馬百匹鎧五十領征矢五十串弓五十挺御手の領下國の
中はくよた郡小三千八百町つゝあるは五郡を奉りせし侍を勝れり
配分いどり折々小何方も出く慰めし骨強き馬十匹馬具を授
て心ごとく運ひはれ所給今何は傳ははき思ふは小遊ばせよとて兩國の
大名三百六十人を勝り日々小城番を奉り候り候り御館作れとて秀衡が
城より西ふありて夜河とて要匯よは洲小御館を作らせ入るは城の津を
に前夜河東の秀衡館之西を洞空を窺そ峻岨なるふ小ははたりり
城廓を構へ上見ぬ勢はれはくありりなきのふはくは空山伏りふあり
一り武威めやれり陸奥出羽二州の將軍となりて栄花一時國こかり
はれりて其年も若く文治三年小成りり判官殿高館小後せぬや
次信忠信をともめ西海ゆく討死する者とも忠の深きより其眞張ふ入
吊りせ作出さる辨慶法を流し一城小延喜天曆の帝あも比せりや
貴僧を清し佛事法執行ふきより秀衡小申され入道も御芳名と感
即依孫兄弟の母乃方も清使ありけし孫とも後家とも引りて
判官殿御あはれにの御里小御自筆の法再經を授けり吊りせ終ふ人
有難きたれりて感心膽小孫より依孫北尾公申されり兄弟者
の清孝養實小身小放り有難き清公より又い純後の高名何事は
あえり是ほどの清公より城は世に存り候りいそありおあり思ひ
其と孫流小むせひりるされども今い思ひ切ありせ傳幼少者其成相續りて
君も人いませ童名もく傳中申され判官殿は秀衡の名も終

屋なれども見せし者の形見あれ義経名成はくぞうとわう秀衡おま
せよと清使有られ入道内々申上度折り小僧思入斗くと申上られ
比の秀衡あひてと宣へも弟く髪取上烏帽子着せて清前小僧の
判官殿悦ひ給ひ実小梅檀を二家より芳一次信若は佐藤三郎義信忠
信若は佐藤四郎義忠と名付ぬ尼公斜めは悦ひいふ小泉三郎兼て申せ
一物我君へあれと申られ佐藤の家小僧名を奉は其外諸士達も
非れくもあませて尼公は夜も口説申されは同く兄の着けは清とも
して下り清前小僧縁ども小鳥帽子着せあひはうり娘のほほは清家
まなれ二人の嫁もかれ人の幸孤一は思ひ中一別き一時の如く声も清
越しはわ君も哀れ小思清波せれあまを秀衡をとり清前小僧居人々
袂を敷小僧く各あまを流しは判官孟より上りぬ義信小僧の盃の恭
拜當座の會秋はあま小僧あまを流しは次信小僧も似るその式は文
八清中義経が命小僧り一は清前あ家の眼を驚うたる幸類ひあは

漢の紀信やとあまを流しは主君心ざし清さ者後忠義の候あま我家
せかき幸則我幸懐くは小僧義経を父と思へはわく清産近くはれこれ
の髪と梅せかの清波せれあは其時亀井戸岡伊勢屋控頭兼房あまを
辨度坂とめりて声をまき我流小僧皆有く清波をとり義忠小僧と
下され汝が父よりは山より大衆退去りしは義経を助けて只一人嶺小止を
いひ一は義経もとめり人幸成候一は小僧人や千度百びりしは侍の徳
論言も同一汗のゆりや既小自害せんや日一は力及ぬる人幸成候一は
なほ小教百人の敵を終六七騎めて防ぎ剝鬼神のやれ備せ一は横河の覚
を討取都小登り江間小四郎を引け其れも依ぬる六条堀河の古く宿所
を尋見行を見さし思ひて寝おく腹を切し志をれしはあまをといふ
若の芳志つるせうとせし例きある忠居汝も忠信小方あまは者あま
又波はくは判官兼伊勢三郎小令一は小梅織印の花織の鑑をひふ
トマはの尾公波をとりてあま有流の清波や侍を剛也も功あまを

海等も成人仕り父も如く君の沖用ふまゝ名を後代ふし不忠義仕ふ事ふ
方とて者も友債者に笑れ後指をさる人ち家の焼僅の事御前
申まれとく義うさめよ中誓申なる各まれをばて兄弟が剛ありしも道理
かや只今厄公の申中も武さくおのく感ト入ふまれり
忠信の首と鎌倉へ送ふ時頼朝御宣ひらひか親の忠臣の首を天宮へ晒す事
恐れあつ却て悪魔とぬく陸身とみれその鎌倉聖長末流小僧空城
別当信小命トて二百三十六鉢の經を書寫して供養せられりむし漢の高
祖の時敵の馬田横討負て海濱小遊く自教り高祖敵を忠と美し
王者此礼をのみ帰葬一祭れあれりの例ふよあらん

源義経渡海蝦夷

文治四年十二月十日の頃より秀衡入道重病をうけ自教重く病行を善樂
扁鵲が術も叶はれ同日廿一日の暁小僧はさくならぬ一門は悲しむとたひ
せられた判官辰比より一聞大にわらわらぬ馬小一鞭を進めてきたり

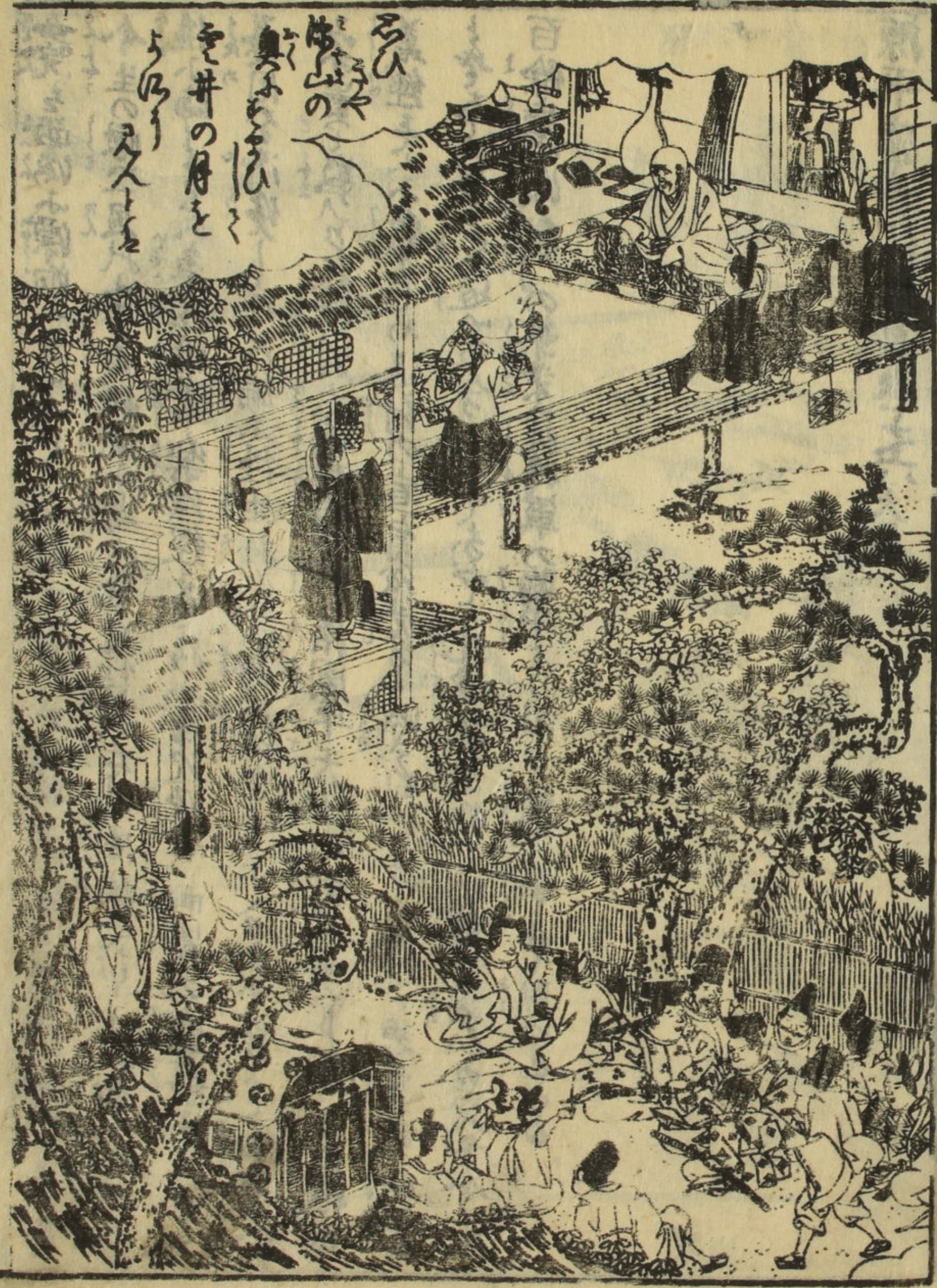
空に此駈小抱さほせ孫ひて修せられり道の境を隔くもまてる事も入道
とれくまを信父義朝小ニヤ少くあれ母は都小おそれるも軍家小後ら
を互ふおめれ兄弟多しせども所々小散て逸事もなく刺憐をまれば
なき頼朝小不和くいなる親の歎さ子乃別せせりともあれ去りて悲し
ひの事限りか一兵義経が運の極小物とく片も猛き沖公を引く海に
歎さぬひのりかて入道死にたれとも夏家来あく兄貴れ子も打て判官
出仕して其年も苦小なり鎌倉屋小奥州の太守秀衡入道死去にけりま
て恭衡小作をされりさうい密小義経を討仕り常陸國を賣りてをるる
や使あまの腹の舎身和泉三郎又錦戸比津田五郎あ名を小成ふり
六親不知りて三寶加護かといわれ城の之和泉三郎軍勢成敗多使へ不
意小高籠城へ押寄四方取圍て一度小穴をかち焼討せりてりいひ友
運の窮せとて義経良從せ腹のさ切く煽の中ち飛入ひりる辨慶も長門を
敵を防ぎ一やも黒煙小むせり其後死たりなるまれを武藏房辨慶衣

川の之往生を云々難一なる恭衡判官殿を安く七一鎌倉(附)頼朝の
作らざる不思議の者なり頼朝よりほを討七はのちの言をい現生
頼朝が兄弟と知りわく院宣あれはてなく討つるを奇情あれや
恭衡をくめ宗徒の良後まで首級斬く集れはまらぬ故入道遺言の
如く錦戸比津月二人の両国を閉き恭平和泉の判官殿の下知の軍
世を争ひて成果へ親の遺言成すといひ君不忠をい悪逆不道を起
し七令も亡ひ子孫絶く代々の所領他人の寶中あつて悲しけれ侍士
た人々忠孝を専やせといふべしは情ありしものも伊豫守従五
位上源義經朝臣を古今名将ゆく磯山童子も其英雄を賞ます幸
年久し修小文治五年清泰二十三年中、生害し或渡り判官殿武
藏坊常陸房其外良後をほく蝦夷千嶋(抄)の國を伐後(將軍と
成り今に宮殿を宮て義經大明神と崇祀とを國大し蝦夷を野作せ
摩凡地理風流なり持々れ産物あり北海より東室韋チロヤリウスラント

あれを莫斯未亞達韜と稱り蒙古哈密あれはうへの伊香廬乃地庵の伊
州へ又良珍の朝大清小属れあれを夏那達韜と稱りチロヤ蝦夷人
あま成り人なり力人といふ滿州カラフト和俗あれを稱してみか奥蝦夷と
いひやうはく伐後(領)せられ一も名りんや

法皇大原行幸

去程鎌倉より北条時政上洛して平家嫡孫六代御前坂邊に既子孫を
登り城文覺上人北日の延引を申し鎌倉入りする時政都ふありて昔も
色はれし鎌倉へ連りんとて日教をうけて東海道沼津の千太郎原に渡
るべし少既六代を安華北上小孟良等にた刀せり城をすれ助不文覺
鎌倉より令乞して六代御前を都小連を帰さぬ洛北大原寂光院に
八建礼門院慈光庵小梅一また所(後)白河法皇入御しはひむ一今の
後越つてと孫ト後人
池水小岩の青柳散りなく浪の花あまのり成り



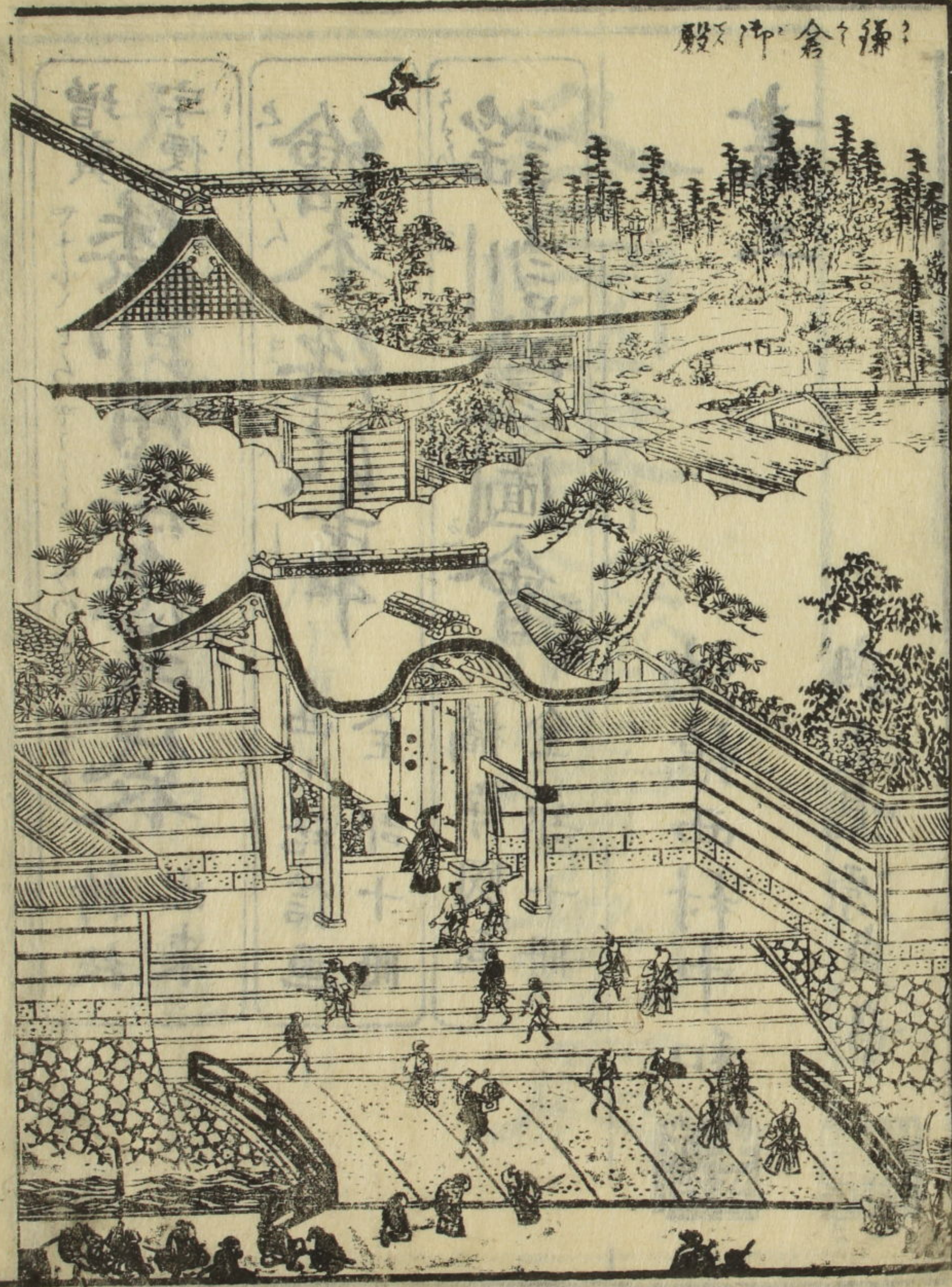
るひ
あまの
かみ
を井の月を
よひ
えん



小原
御幸

馬場の
あまの
かみ
神のまへ
女院

源平盛衰記圖會卷之六 大尾



今生の暇に且れ申長祢藏小遇するは行莫た乃周縁にむしれ如く后妃の
 位小高しき事法性常樂依經を修ふ處に源平兩家の盛衰小つりく
 憂目を清後トクハ偏小往生極樂の勝因のさすりくふるふるやとむあふ
 女不貴く教ハられ柞右大將頼朝卿の治國平天下の計をめぐりし平氏の恨成
 義經も人小常としめ退討の官有依此家を滅され 幸い源平の思ふ事あり行累
 とをたれり文道はあつてあやう北條梶原如との勢を用ひの久や今六
 百餘歳の後武門の繁栄は此將軍の胸中より出る舞の傘を思ひてなる

源平盛衰記圖會卷之六 大尾

增廣 ヤサしくせらる 倭節用集悉改袋 よりの 新板 出来

繪本倭比事 えほん

西川祐信画 全部十冊

誼訓蒙圖會 うゑん

摘守國画 全部十冊 近刻

畫工

法橋西村中和



奥文鳴源貞章



各國書籍賣捌處

府下東區備後町四丁目

大阪書林

梅原龜七

